

丹後地域の調査成果

—近年話題をあつめた遺跡から—

1. 宮津市成相寺旧境内の調査—古代・中世の山岳寺院の分布調査とその展望—
河森一浩 P 1 ~ P10
2. 京丹後市大内北古墳群の調査—古墳時代の特色ある埋葬施設—
辻本和美 P11 ~ P26
3. 舞鶴市中山城跡の調査—戦国期の山城の防御施設と宴の場—
伊野近富 P27 ~ P36

期日：平成23年6月5日(日)

場所：宮津市 みやづ歴史の館 文化ホール

主催 京都府教育委員会

宮津市教育委員会

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

宮津市 成相寺旧境内の調査 - 古代・中世の山岳寺院の分布調査とその展望 -

宮津市教育委員会

主 事 河森 一浩

1. はじめに

宮津市教育委員会では、平成 21 年度から 5 か年計画で、古代・中世の山岳（林）寺院である成相寺旧境内の範囲内容確認調査を実施しています（図 1）。今回は、現在行なっている調査の概要を報告し、成相寺の重要性や今後の調査の展望について述べたいと思います。

2. 成相寺の概要とこれまでの調査

(1) 成相寺の歴史（表 1）

『成相寺古記』によると、同寺は慶雲元（704）年に創建され、「精（堂）舎・舞台・鐘楼・五重塔・三重塔・多宝塔・阿弥陀堂・薬師堂・地藏堂・惣門」などの伽藍を誇ったと伝えられます。平安時代になると、『今昔物語』に「なりあい観音」の説話が収録され、『梁塵秘抄』には「伊豆の走湯、信濃の戸隠、駿河の富士、伯耆の大山、土佐の室戸、讃岐の志度」とならぶ霊験所として成相寺が登場します。この時期には、京都の貴族の間でも成相寺の名前は知られる存在だったのです。

特に、平安時代後期には、熊野参詣など貴族・僧侶による霊場への巡礼が盛んとなり、成相寺は西国三十三所霊場の一つに位置づけられました。親鸞の曾孫である覚如など著名な僧侶も成相寺を訪れ、その足取りが『慕婦絵詞』（重要文化財／西本願寺所蔵）に描かれています。

しかし、『成相寺古記』によると、応永七（1400）年に山崩れが起こり、境内が倒壊したとされています。現在の成相寺は、この時に再建されたもので、戦国時代の戦乱や度重なる火災を乗り越えて、今日に法灯を伝えています。

(2) これまでの調査成果

宮津市教育委員会では、平成 14 年度から 18 年度に成相寺の調査を実施しています。

現在の境内から70 mほど登った地点には「古本堂跡」や「奥の院」という地名が残り、この一帯で約60か所におよぶ平坦地が確認されました(図2)。部分的に石積みなどもみられ、寺院に伴う人工的な造成地と考えられました。

また、平坦地の発掘調査によって建物跡や井戸・石列などが検出されました。特に、a1区では平坦地を確保するための石垣や、建物の柱を建てた礎石が検出され(図2)、奈良時代後半から平安時代の土師器・須恵器が出土しました。慶雲元(704)年とされる創建年代とは約50年の開きがありますが、成相寺の成立が奈良時代に遡る可能性が高まったという点で、重要な発見となりました。

これ以外の調査区でも、奈良時代から南北朝時代の土器などが出土し、その年代は、応永七(1400)年の山崩れで境内が倒壊したとする『成相寺古記』の記述と一致します。「古本堂跡」・「奥の院」と呼ばれてきた一帯には、現在の境内に先行する寺院跡が存在した可能性が高く、新たに「成相寺旧境内」と名付けられました〔東2007〕。

3. 平成21・22年度の調査成果

こうした調査成果を受け、平成21年度から5か年計画で調査を継続しています。将来の保存・活用を前提に、①寺域または関連する構造物を含めた遺跡範囲の確定。②参詣道の確定。③旧境内地の伽藍配置の解明。という3点を目標にして、分布調査・測量調査を行っています。

(1) 成相寺の範囲

江戸時代から明治時代の絵図には、成相寺・成相寺村の境界を示したものがみられます。地表に残る平坦地や遺構と対比しながら、寺域または遺跡範囲の確定を目指しています。

旧境内の広がり 平成14年度から18年度に、発掘地点を中心に測量調査が行われました(図2)。さらに周辺の尾根にも、旧境内に伴うと考えられる平坦地が広がっており、こうした範囲について測量調査を進めています。

また、成相寺の東半部で分布調査を実施すると、真名井川に沿った谷部にも石垣をもつ平坦地が広がっています(図3)。江戸時代以降の村落や耕作地の可能性もありますが、白山平泉寺(福井県勝山市)・金剛輪寺(滋賀県愛荘町)・百濟寺(滋賀県東近江市)などの山岳(林)寺院では、谷部に石垣をもつ坊院が展開する例が知られ〔勝山市教育委員会1994ほか〕、注意が必要です。

現境内と『成相寺参詣曼荼羅』 現境内についても、中・近世の伽藍の復元的研究が重要な課題となります。室町時代以降に描かれた『成相寺参詣曼荼羅』は、境内再建後の成相寺の姿を伝える貴重な資料です。参詣や募金の勧誘を目的として製作され絵画のため、

表現に誇張があるかもしれませんが、描かれた建物の配置は現境内周辺の平坦地とほぼ一致しており（図4）、今後、発掘調査を行う上で参考になります。

中世城館の問題 成相寺は南北朝時代や戦国時代に戦乱の舞台となり、「成相寺要害」・「成相寺城」という表記が文献史料にみられます（表1）。山岳（林）寺院が城館として利用される例は各地で報告されており、これまでみてきた平坦地が、寺院ではなく城館に伴う可能性も残ります。

（2）参詣道の推定

西谷道・小松道・中野（本坂）道・大谷道・真名井道・東谷道などの参詣道が知られています（図5）。『成相寺参詣曼荼羅』や雪舟『天橋立図』、名所図などの絵画には参詣道や参詣の様子が描かれ、江戸時代から明治時代に製作された絵図にも複数のルートが記されています（図6）。豊富な絵画・絵図資料と、地表に残る道路状遺構の対比ができる点は、成相寺研究の大きな特徴となりそうです。

中野（本坂）道 絵画の中で頻繁に描かれており、成相寺参詣の主要ルートと考えられます。沿道には板碑や道標となる丁石ちやうせきが点在し、中世の参詣道の雰囲気ふんぎを現在もよく残しています。『成相寺参詣曼荼羅』をみると、2つのルートの合流点あはせに祠ほこらが描かれており、この場所には平坦地が残っています（図5 - A）。

西谷道 丹後郷土資料館の西側から成相寺へ至るルートで、現在、西谷川に沿って車道が走っています。成相寺の手前には廃村となった「西谷村」の石垣が残り、『成相寺山絵図』や『字成相寺略全図』の表現と一致します。また、『成相寺山絵図』には「西門前」という地名がみられ、成相寺の寺域を考える上で注目されます。

現在は、舗装された急峻な坂を登り成相寺に到着しますが、西側の尾根上にも道路状遺構どうろじょういこうが残ります（図5 - B）。さらに、東側の尾根上にも部分的に道路状遺構が残り、国分寺こくぶんじとの関連が注目されます（図5 - C）。

真名井道 真名井川に沿って成相寺へ至るルートで、谷部には石垣を伴う平坦地がみられます（図3）。また、東側の尾根上にも複数の道路状遺構が残り、尾根の端部や道路状遺構の合流点に平坦地が広がっています（図5 - D）。

（3）まとめと課題

成相寺の分布調査を進めていくと、人工的な平坦地が広範囲に分布することがわかってきました。この中には、寺院に関連する遺構のほか、中世の城館や江戸時代以降の村落・耕作地が含まれる可能性があり、発掘調査によって平坦地の時期や性格を確認する必要があります。

また、西谷道や真名井道など谷部を走る参詣道では、近接する尾根上にも道路状遺構が

みられ、沿道には平坦地もみられます。現在のルートは、江戸時代から明治時代の絵図と一致することから、尾根上の道路状遺構は古代・中世に遡る可能性があります。こうした問題の解決も、発掘調査による時期認定が重要な鍵となるため、今後は発掘調査を加えながら、成相寺の全体像の把握に努めたいと思っています。

4. 丹後府中と成相寺 —今後の展望—

最後に、成相寺が所在する府中の歴史にも触れながら、予察的な展望を述べておきます。

阿蘇海の北岸に位置する府中は、奈良時代以降、古代丹後国の中心地となりました。政治・行政機関である国府こくふは未発見ですが、国分寺や一宮である籠神社このじんじや、飯役社いんやくしやなど国府に関連する施設が点在しています(図1)。奈良時代には、平地部の本寺(官寺)の学僧にとって山林修行が重要な要素になったとされ、山城国分寺と笠置寺かさぎでら、伊賀国分寺と毛原廃寺けはらはいじなどの関係が注目されています〔上原 2002〕。成相寺の成立も、丹後国分寺の設置に関連する可能性があり、成相寺と国分寺を結ぶ西谷道の調査は重要な意味をもっています。

中世になると、府中には守護所が置かれ、政治的・行政的な機能を維持します。難波野遺跡なんばのいせきの調査では、平安時代後期から鎌倉時代の掘立柱建物跡ほったてばしらたてものあとや溝状遺構が検出され、官衙的な木簡かんがが出土しています。また、近接する籠神社でも、この時期に経塚きょうづかの埋納とりいや鳥居の造営がみられ、面的な開発が想定されます〔河森 2011〕。平安時代後期は、成相寺が西国三十三所霊場に位置づけられた時期に当たり、府中や天橋立への参詣客が増加したと推定されます。籠神社周辺の開発も、これに伴う動きであれば、中世の府中において成相寺の果たした役割は見逃せないものになってきます。

これまで府中の中世史は、雪舟『天橋立図』や国分寺再興の問題が注目を集め、室町時代を中心に研究が進められてきました。しかし、成相寺を軸に府中の歴史を見直すと、平安時代後期から鎌倉時代の重要性が浮かび上がってきます。今後とも、府中の考古資料に目を配りながら、成相寺の調査をさらに進めることで、こうした新しい研究課題を深めていきたいと考えています。

■参考文献■

勝山市教育委員会 1994 『よみがえる平泉寺』

上原真人 2002 「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265号

宮津市史編さん委員会 2005 『宮津市史 絵画編』

東 高志 2007 『成相寺旧境内 —範囲内容確認調査の概要—』宮津市文化財調査報告 第40集

河森一浩 2011 「難波野遺跡の発掘調査 —平成21・22年度の範囲確認調査—」『太邇波考古』32

表1 成相寺関連年表

時代	年号	主な出来事
奈良	慶雲元年 (704)	建造、開山は獵者。
平安	保延元年 (1135) 頃	僧行尊が成相寺以下三十三箇寺を順礼。
	応保元年 (1161)	僧覚忠が成相寺以下三十三箇寺を順礼。
南北朝	建武四年 (1337)	成相寺荒河太郎三郎城を南朝軍が攻撃。
	建武五年 (1338)	成相寺要害に引き籠る。
	貞和四年 (1348)	本願寺覚如、丹後国府・大谷寺・成相寺を巡覧。
	延文二年 (1375)	成相寺城などで合戦。
室町	応永七年 (1400)	嶺崩れて谷と成る。
戦国	永正四年 (1507)	武田氏が丹後府中に侵入し、丹後府中城に詰陣。 一色殿は今熊野城、信永は阿弥陀城に立て籠もる。

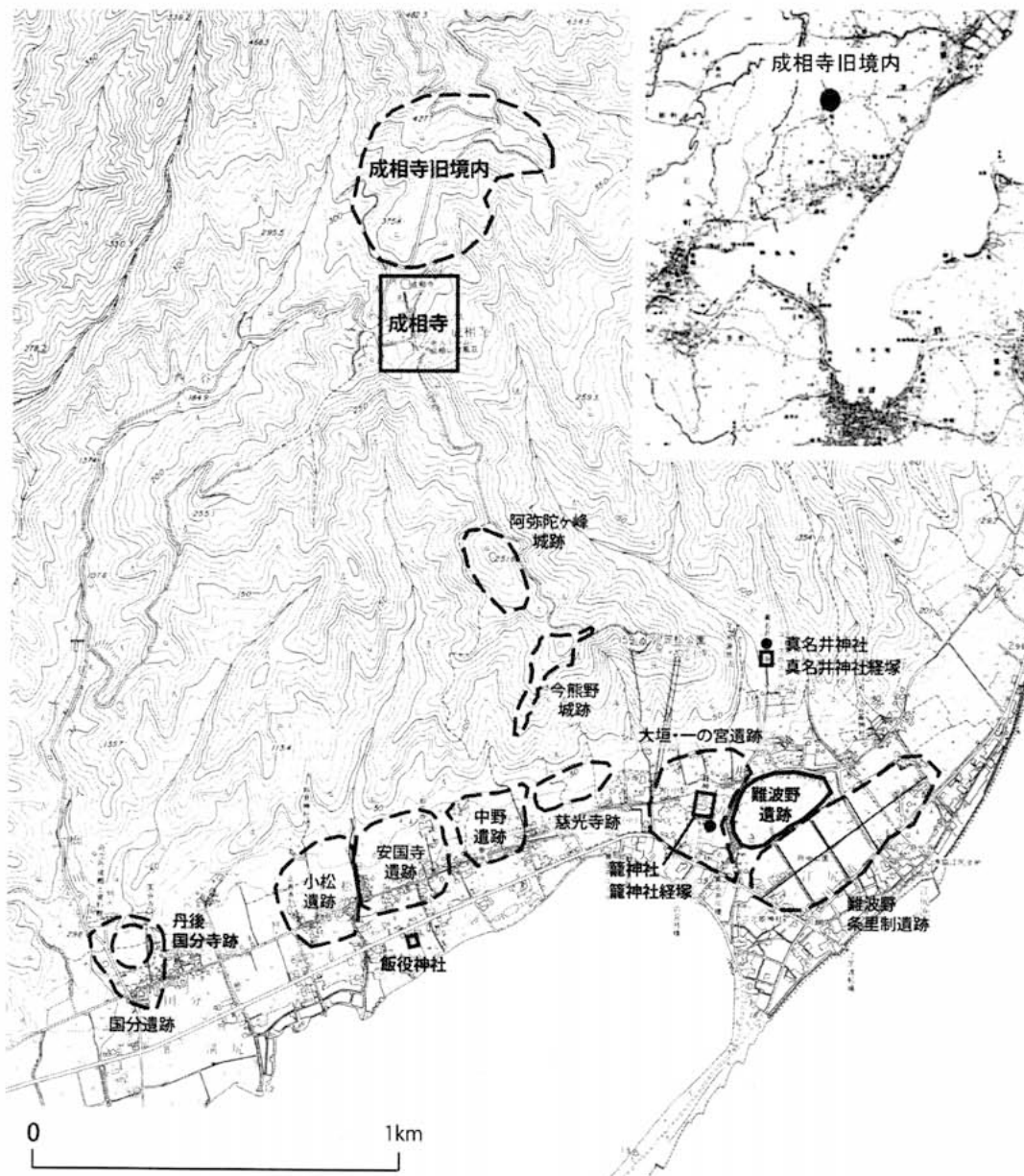


図1 成相寺旧境内の位置と周辺遺跡

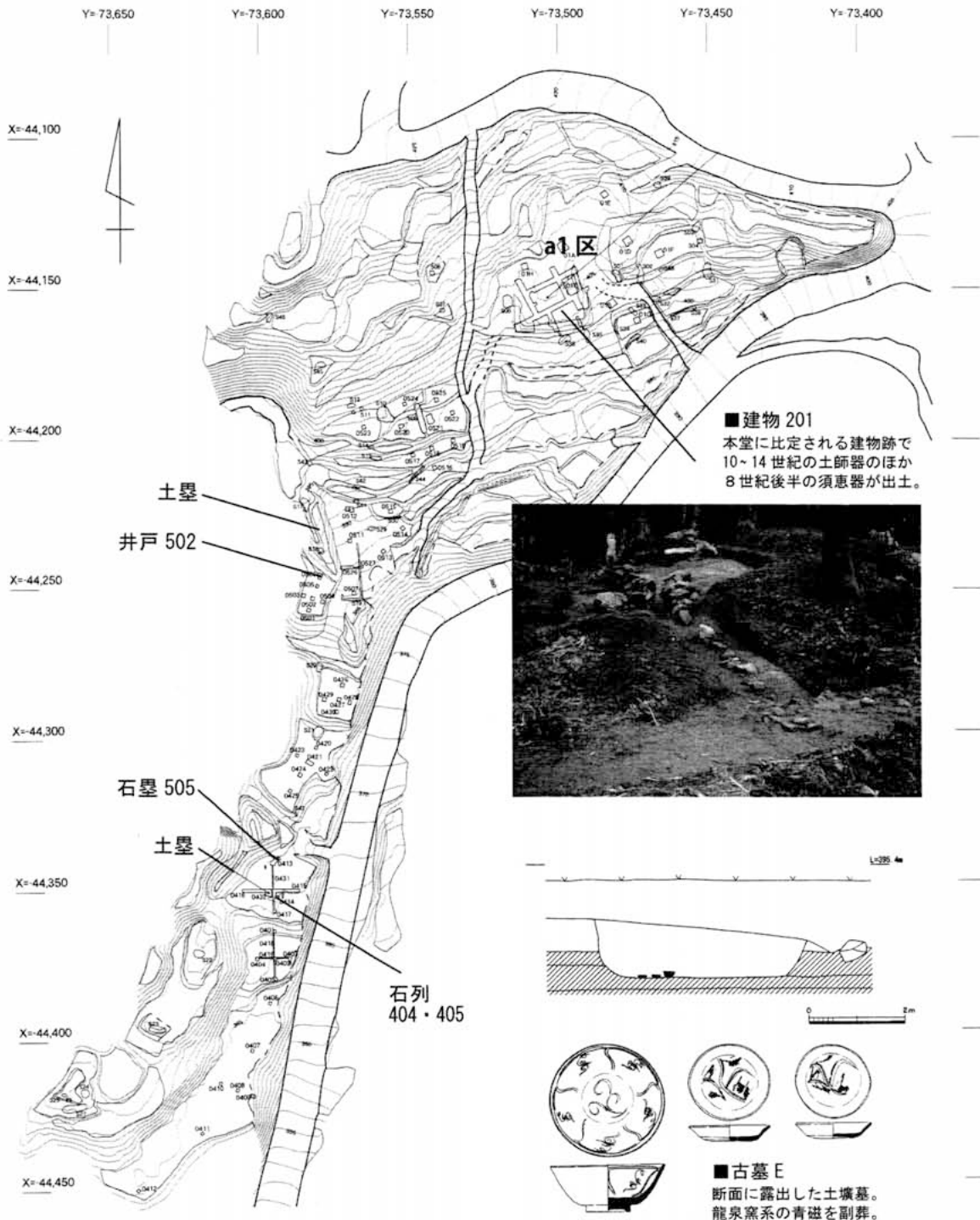


図2 成相寺旧境内の測量図と主要な遺構 [東 2007 をもとに作成]

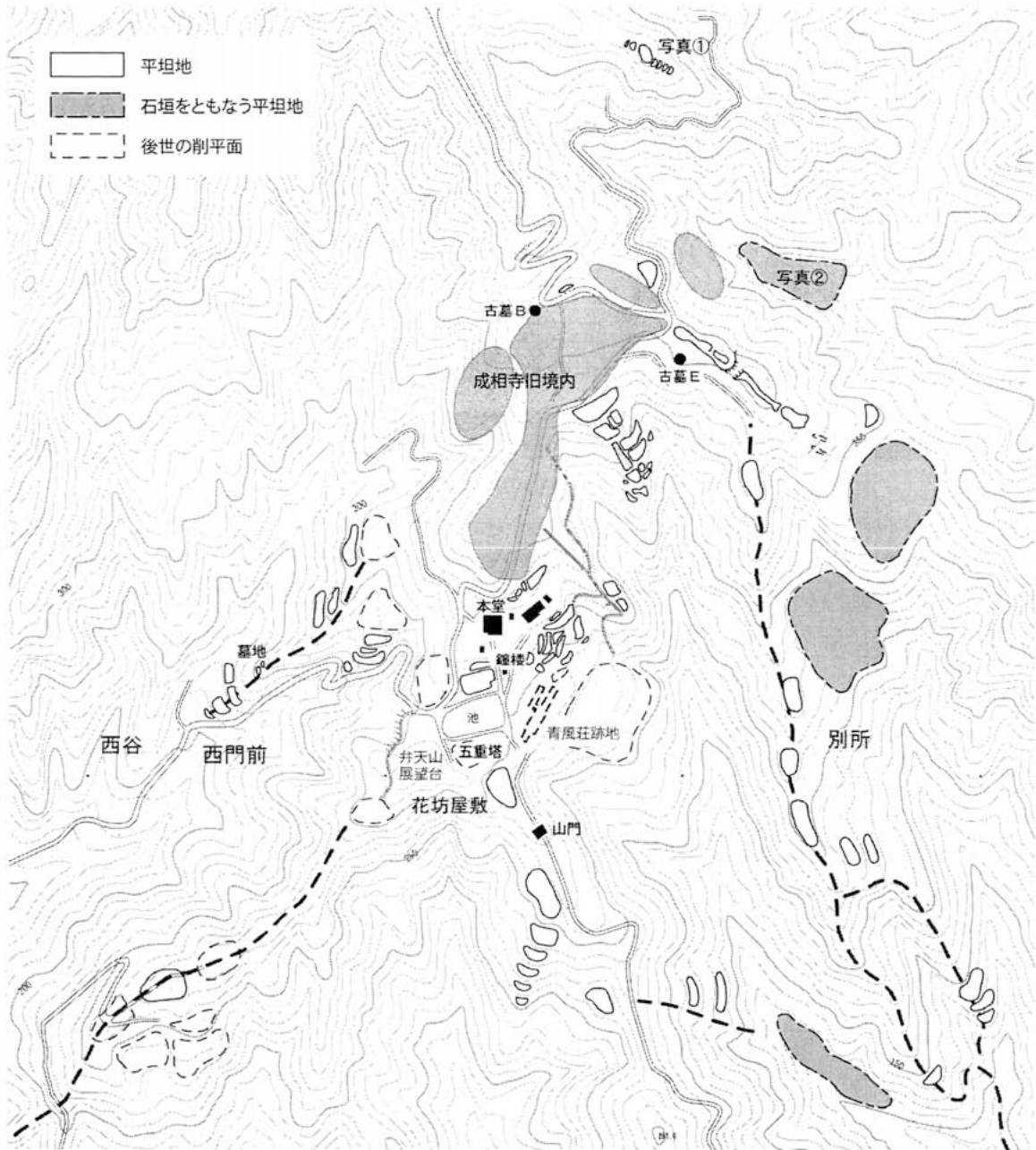


図3 成相寺旧境内周辺の平坦地



写真① 旧境内北側の段状遺構



写真② 石垣を伴う平坦地



図4 『成相寺参詣曼荼羅』と現境内周辺の平坦地



写真③ 本堂と鐘堂



写真④ 池と復元された五重塔



写真⑤ 五重塔南側の平坦地



写真⑥ 庫裡南側の平坦地

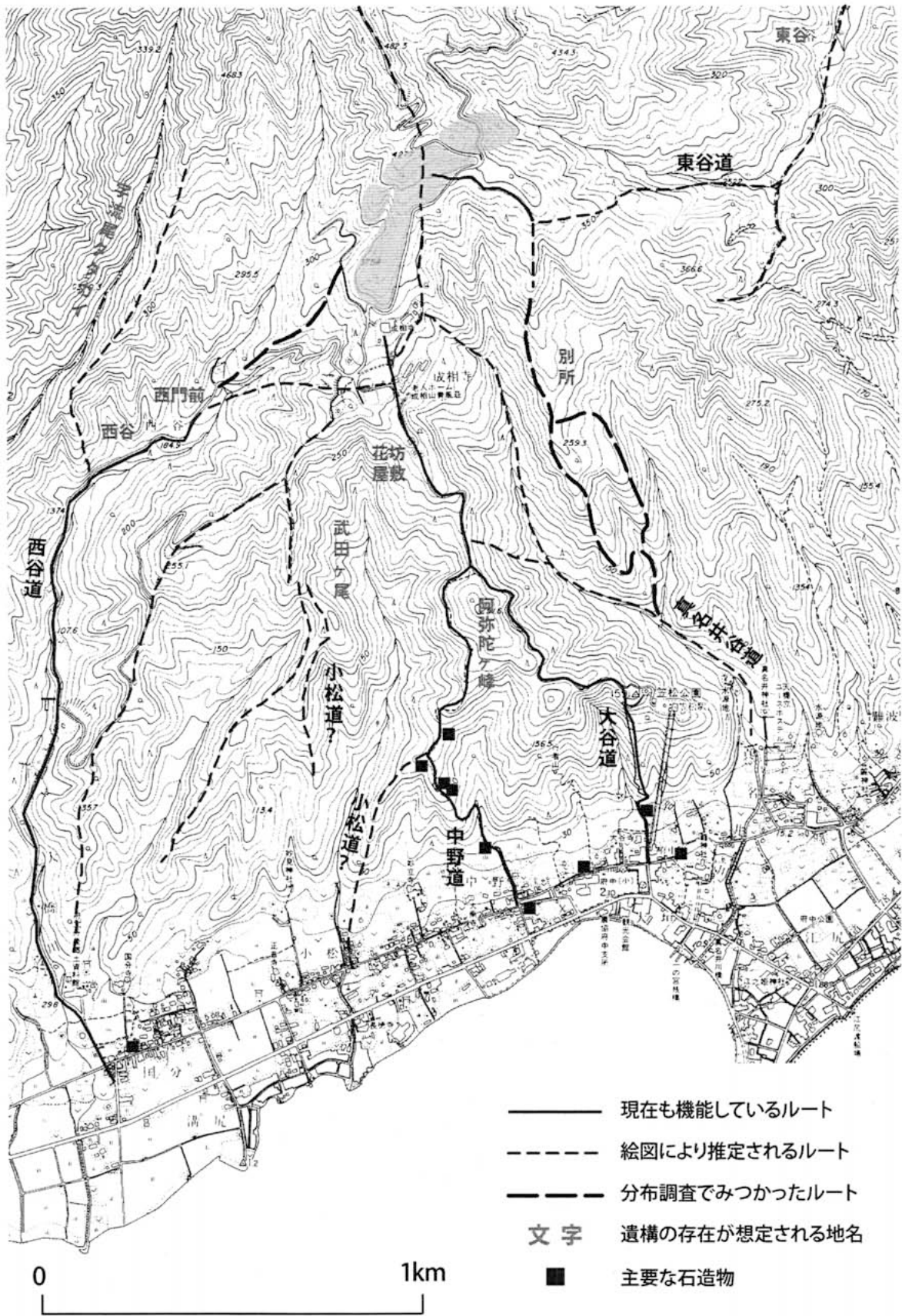


図5 推定される参詣道と分布調査

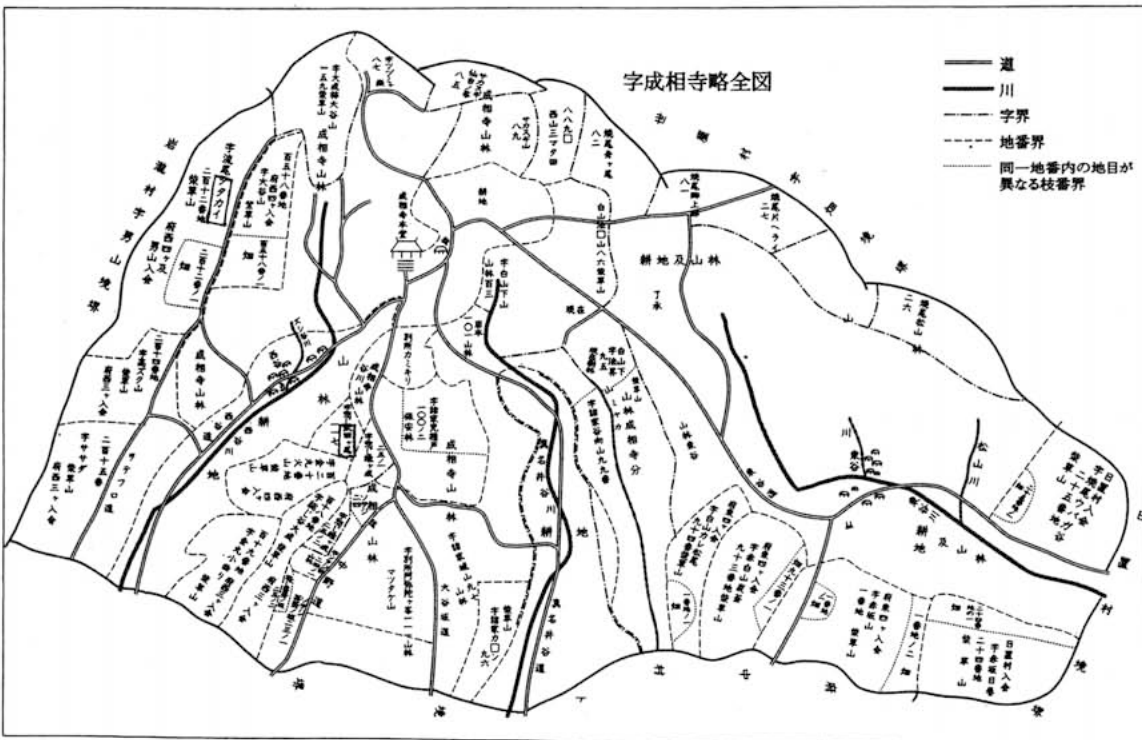
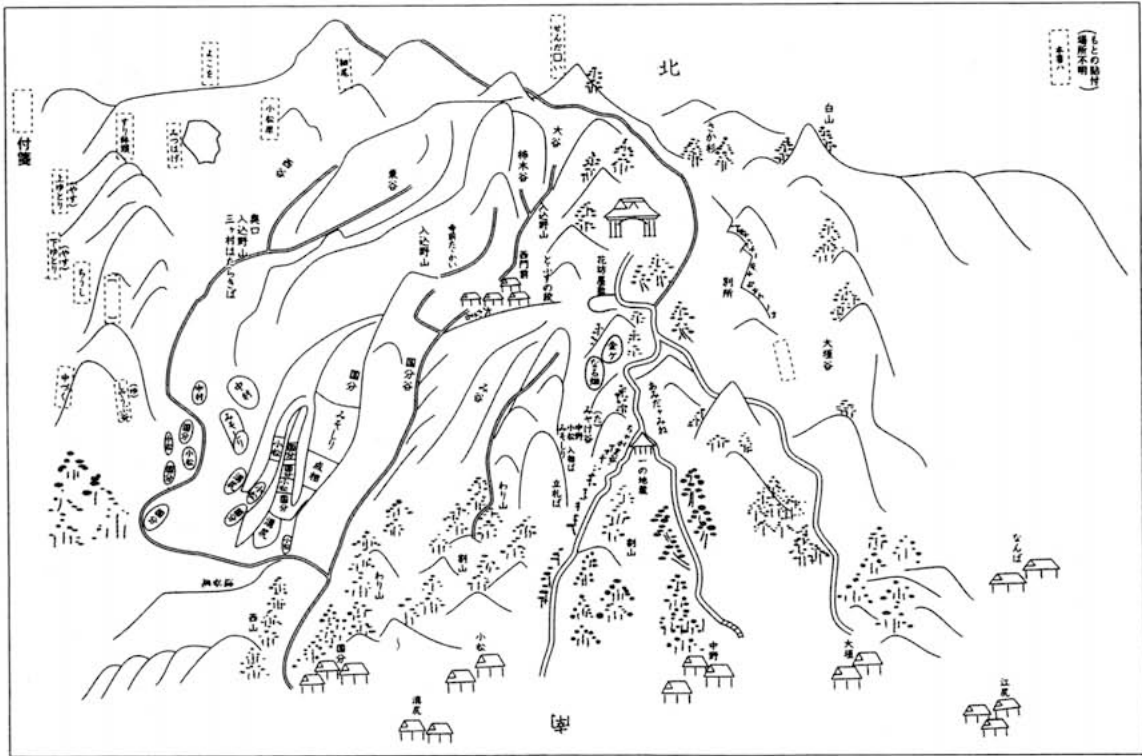


図6 参詣道を描いた成相寺周辺の絵図〔宮津市史編さん委員会 2005〕
 上：成相寺山絵図（江戸時代／国分自治会） 下：字成相寺略全図（明治時代／成相寺）

京丹後市 大内北古墳群の調査

— 古墳時代の特色ある埋葬施設 —

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

前職員 辻本和美

1. はじめに

大内北古墳群は、京丹後市大宮町森本星ノ内に所在する古墳群で、5基の古墳によって構成されています。今回の発掘調査は、鳥取豊岡宮津自動車道(野田川大宮道路)の新設工事に先立ち、平成22年4月から9月にかけて実施しました。

大内北古墳群の5基の古墳(1～5号墳)と、周辺の丘陵上に分布する3か所の古墳状隆起を対象に実施した結果、3号墳から合計9基の埋葬施設(主体部)を検出しました。

2. 位置と周辺の古墳

大内北古墳群は丹後半島を貫流する竹野川の上流部に位置し、南北に長くのびる幅の狭い谷平野に派生する丘陵尾根の端部(標高115m)に立地しています。同じ丘陵上には、大内古墳群(計16基)、大内東古墳群(計3基)が分布しています。このうち調査が行われた大内1号墳は、径約25mを測る楕円形墳で、墳丘の中央部分から割竹形木棺を納めた長さ2.7m、幅0.7mの竪穴式石室1基が検出されました。石室内からは、鉄製の武器類や農具類が出土しました。古墳の築造時期は、4世紀後半から5世紀前半頃と想定されています。また、大内古墳群からほど近い大谷古墳は、全長32mの帆立貝式前方後円墳で後円部中央に設けられた赤色顔料塗りの組合式石棺内から熟年女性の人骨とともに、掬文鏡、玉類(硬玉製勾玉・ガラス玉)、鉄斧、鉄剣、刀子が出土しました。大谷古墳の築造時期については、大内1号墳と同時期頃と想定されています。

3. 調査の概要

大内北3号墳は、測量調査の結果、自然地形を利用した南北23m、東西25m、高さ4mのややいびつな円墳であることがわかりました。古墳の頂部は、長軸が12m、短軸が8mを測る平坦面を形成しています。墳丘に葺石や埴輪は認められ

ませんでした。墳頂からは奈良～平安時代の土器片が出土しています。

調査の結果、墳頂部分からたてあなしきせつかく 竪穴式石槨 (小型竪穴式石室) 1基、こがたたてあなしきせきしつ 組合式箱式石棺 4基、くみあわせしきはこしきせつかん 木棺 (直葬) 3基、もっかん 小形のじきそう 箱式木棺 1基の形式の異なる合計9基の埋葬施設が検出されました。

各埋葬施設は、ふしよくど 腐植土下の花崗岩風化土 (バイラン土) の上面から掘り込んで構築されていました。墳頂平坦面の北側の縁辺には、竪穴式石槨1基がしゆじく 主軸を東西に置き、墳頂平坦面の東側と南側には、箱式石棺4基が墳頂平坦面の縁辺に沿うように配置されていました。木棺直葬の埋葬施設は、中央部から西側にかけて棺の主軸をほぼ南北に揃えて並んで配置されていました。各埋葬施設は、このように墳丘の平坦面に密に配置されていることがわかりました。

なお、埋葬施設については、構造や形態から次の3つのグループに分けて述べることができます。

1) 竪穴式石槨 (埋葬施設 S X 01)

長さ 3.4 m × 幅 2 m のぼこう 墓壇内に、せつかく 石槨のうちのり 内法長さ 2 m、幅 0.5 m、高さ 0.3 m の竪穴式石槨を構築しています。石槨の側壁は1から3段積みでこの上にてんじょうせき 天井石6枚を架しています。両側のこくちぶ 小口部は、へんべい 扁平なわりいし 割石1石で構成しています。石槨外側の墓壇内には裏込めに多量のかくれき 角礫を詰め、さらに天井石の上面は灰色の粘土で覆っていました。石槨の石材は鑑定の結果、黒雲母花崗岩・角閃石・砂岩等が使用されていることがわかりました。石槨の床面からは木棺の痕跡などは見つかりませんでした。内部から副葬品のヤリ先 (短剣?) 1振りとノミ状鉄器1点が出土しました。

2) 組合式箱式石棺 (埋葬施設 S X 02・03・05・06)

それぞれ長さ約 2.2 m、幅約 1.3 m、深さ 0.6 m 前後を測る墓壇内に、長さ 0.6 ~ 0.7 m、幅 0.2 m、深さ 0.2 m 前後の組合式箱式石棺を構築するものです。石棺の本体 (身部) はやや扁平な割石を使用し、この上に縦長の石材を並べてふたいし 蓋石にしています。いずれも底石はありません。このうち S X 05 は、竪穴式石槨 S X 01 と比べて、全体の規模は小さいものの墓壇と石棺の間に角礫を詰めたよく似た構築方法をとっています。また、S X 02 では側石の内側面に赤色顔料 (ベンガラ) が塗られていました。出土遺物は、S X 06 から鉄製の刀子1点が出土したのみで、他の石棺からは見つかりません。

3) 木棺直葬 (埋葬施設 S X 04・07・08・09)

花崗岩の風化土を掘り下げて墓壇を構築したあと、さらに内側に長さ約 4 m、幅 0.8 m 程の木棺を据え置くための土壇を掘り込んでいます。どこう 土壇の床面はゆるやかなU字状であることから底部がわりたけがた 割竹形もしくはふなぞがた 舟底形の木棺が安置されていたものと想定されます。S

X 07・08 は一つの墓壙内に木棺を二つ並べて配置する珍しい構造をもっています。S X 07 では棺北側の位置から赤色顔料の集積を検出しました。S X 08 の下段墓壙の肩部からは鉄鎌^{てつがま} 1 点が出土しました。S X 09 は棺の両小口^{こぐち}を角礫で固定する特異な構造をもつ小形の箱式木棺であることがわかりました。この S X 09 は、S X 07 と S X 08 の間にきちんと納まるように墓壙が掘られており、3 基の埋葬施設は一体的に構築されたものと思われれます。

なお、S X 04 の墓壙は、S X 01 と S X 07 ～ 09 の木棺群の墓壙によって切られていることから、大内北 3 号墳で今回検出された埋葬施設群のなかでは、最初に構築されたものと考えられます。

4. まとめ

大内北 3 号墳の特徴としては、

- ① 自然地形を利用した中型の円墳
- ② 一墳丘多埋葬墳
- ③ 埋葬施設は、竪穴式石槨、箱式石棺、木棺直葬と分けることができます。

などがあげられます。

築造時期については、出土遺物が鉄器のみで不明な点が多くありますが、おおむね 4 世紀後半～5 世紀初頭(古墳時代前期後半～同中期前半)に位置付けられます。

特に、竪穴式石槨 S X 01 の墓壙が木棺群の墓壙を切っていることから、埋葬方法が木棺から石槨・石棺へと変遷したことがわかりました。

また、古墳の性格については、墳丘の造成に際して自然地形を最大限に利用しており、墳丘の盛土は墳頂部分の一部に限られていること。また、丹後地域の京丹後市権現山古墳、但馬地域の豊岡市深谷 1 号墳、和田山町秋葉山 2 号墳などにみられる古墳時代以前の弥生時代後期の墳墓の系譜を引き継ぐ一墳丘多埋葬^{いちふんきゆうたまいそう}の埋葬形態をとることからみて、古い墓制を踏襲した在地色^{ざいちしよく}の強い古墳と思われられます。

一方、石槨や石棺など石材を使用した埋葬施設は、地理的に近い但馬地域で多く見られるものであり但馬地域との強い関係がうかがわれます。大内北 3 号墳の周辺では、大内 1 号墳や大谷古墳と同様の埋葬施設をもつ古墳が知られていますが、これらの存在は竹野川の中上流域での古墳時代前期から中期にかけての古墳築造の動向を見ていく上で見すごすことのできない要点と考えられます。

大内北 3 号墳は、竹野川上流地域における数世代にわたる有力者の家族墓(集団墓)^{かぞくぼ しゅうだんぼ}と想定され、今回の調査成果は、丹後地域に巨大な前方後円墳が出現する時期の在地有力層^{ざいちゅうりよくそう}

の墓制のあり方を考えるうえに新たな資料を提供したものと思われます。

表1 京丹後市域の竪穴式石室(石槨)の規模比較

古墳名	内法規模 (cm)	副葬品	所属時期
	長×幅×高		
大山墳墓群10号墳第3主体	223×45~53×70		古墳前期
カジヤ古墳第1主体	450×73~75×70	鏡・筒型銅器・石製腕飾類・鉄器	古墳前期後半
権現山古墳第1埋葬施設	400×60×60		古墳前期後半
大内1号墳	270×70×45	鉄器	古墳前期末~中期前半
大内北3号墳埋葬施設S X01	190×28~40×25	鉄器	古墳前期末~中期前半

表2 石材を使用する埋葬施設をもつ丹後の古墳(横穴式石室除く、但し京丹後市以外は参考例)

竪穴式石室(石槨)		所属時期	長持形石棺		所属時期
1	大山墳墓群10号墳第3主体	前期	1	産土山古墳	中期
2	カジヤ古墳	前期後半	2	馬場ノ内古墳	中期
3	大内1号墳	前期末~中期前半	3	宮丸山古墳	中期
4	権現山古墳第1埋葬施設	前期後半	4	願興寺古墳群1号墳	中期
5	岡古墳群2号墳	後期	6	願興寺古墳群5号墳	中期
	蛭子山1号墳(2基)	前期後半		法王寺古墳	中期
	白米山古墳	前期			
	温江丸山古墳	前期後半			
	後野円山1号墳	中期			
	後野円山2号墳	中期			
組合式石棺		所属時期	舟形石棺		所属時期
1	大田南古墳群5号墳第1主体部	前期		願興寺古墳群3号墳(2基)	中期
2	竹野遺跡			蛭子山1号墳	前期後半
3	大谷古墳	前期末~中期前半			
4	左坂古墳群B2号第1主体部	前期		明石愛宕山3号墳(2基)	前期
5	天王山古墳群A13号墳	前期		作山1号墳	前期後半
6	新浜古墳群2号墳	後期		温江丸山古墳	前期後半
7	新浜古墳群3号墳	後期		加悦大師山東1~4号墳(4基)	
8	岡古墳群3号墳	後期		入谷西古墳群(4基)	
9	岡古墳群4号墳	後期		後野愛宕神社古墳群(2基)	
10	勝山古墳	後期		藤野古墳	
11	石プロ古墳	後期		荒神様2号墳	
				倉梯山1号墳	後期
				若宮神社古墳	
				岩滝丸山古墳	中期
				油田古墳	

表3 参考資料：但馬・丹後地域の一墳丘多埋葬(7基以上)の古墳

	古墳名	時期	石室	石棺	木棺	土壙	土器棺	計
京丹後	大内北3号墳	4C末~5C前	1	4	4			9
	権現山古墳	4C末~5C前	1		6		1	8
和田山	秋葉山2号墳	4C中~後		3	4			7
浜坂	高末古墳	4C後			4		4	8
豊岡	深谷1号墳	4C末~5C前	1	2	5		2	10
出石	田多地3号墳	5C前		3	1	8		12



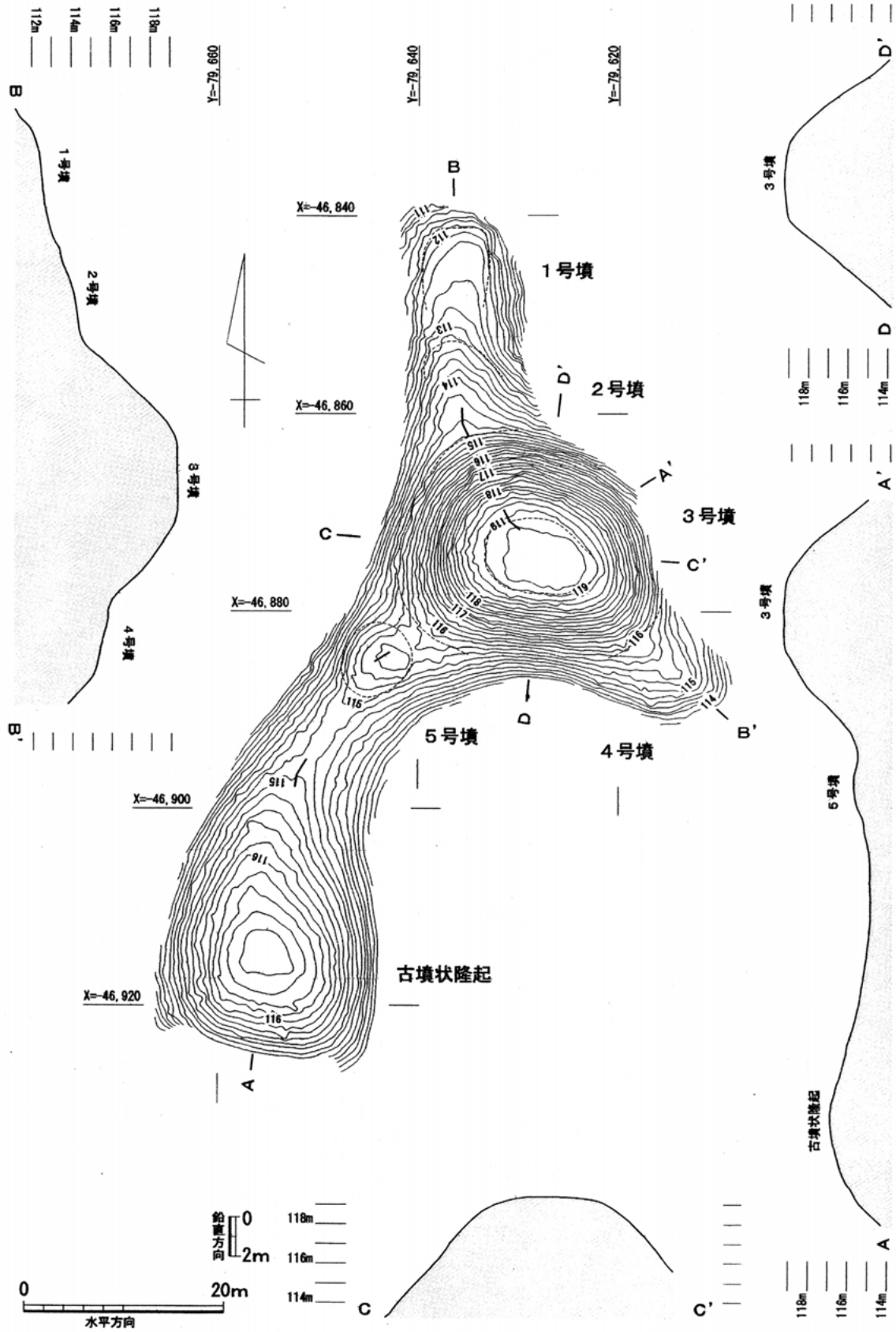
第1図 調査地位置図



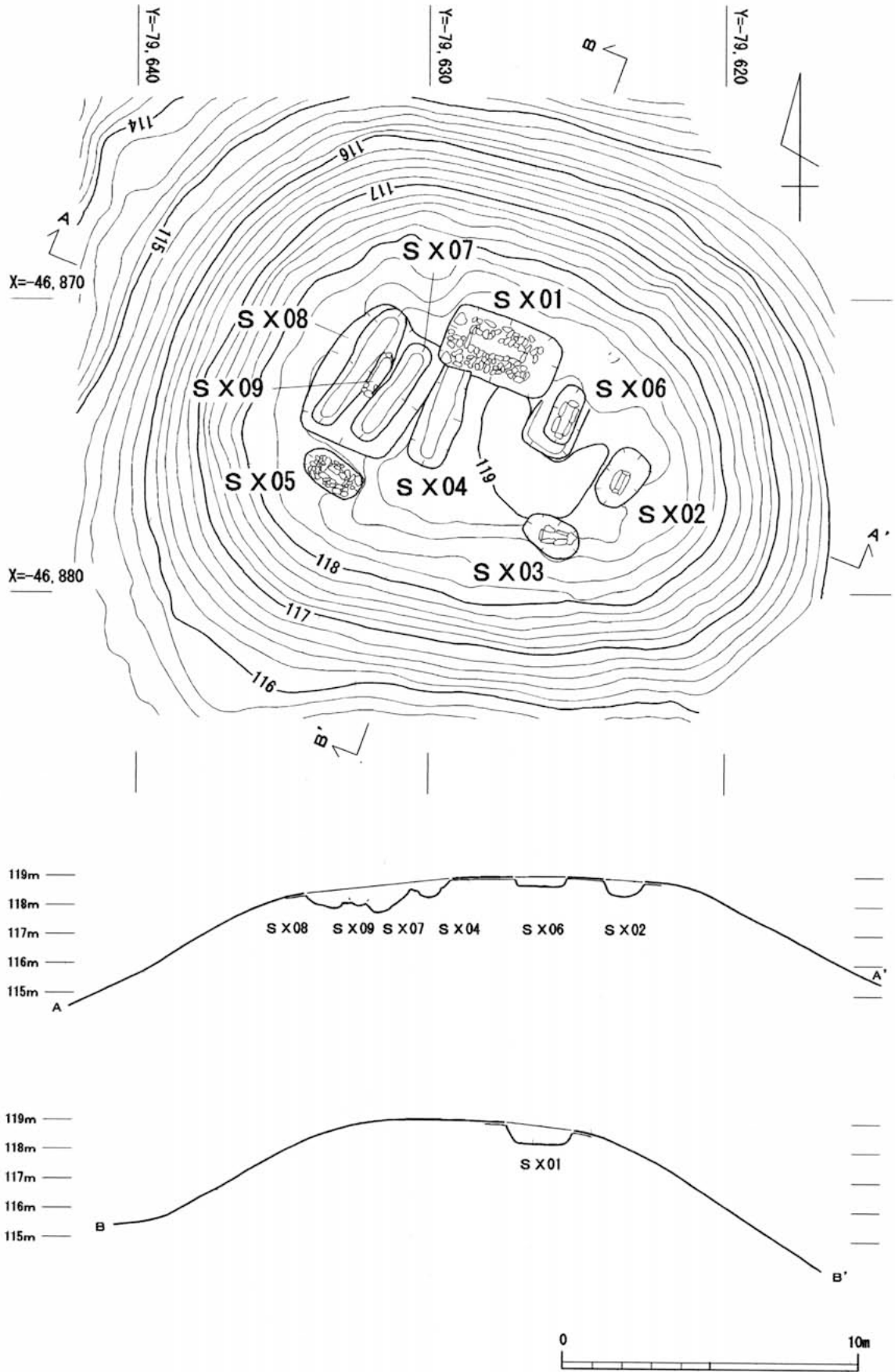
第2図 周辺遺跡及び調査地位置図

(『大宮町遺跡地図 京都府大宮町文化財調査報告』第17集 1999から転載・改変)

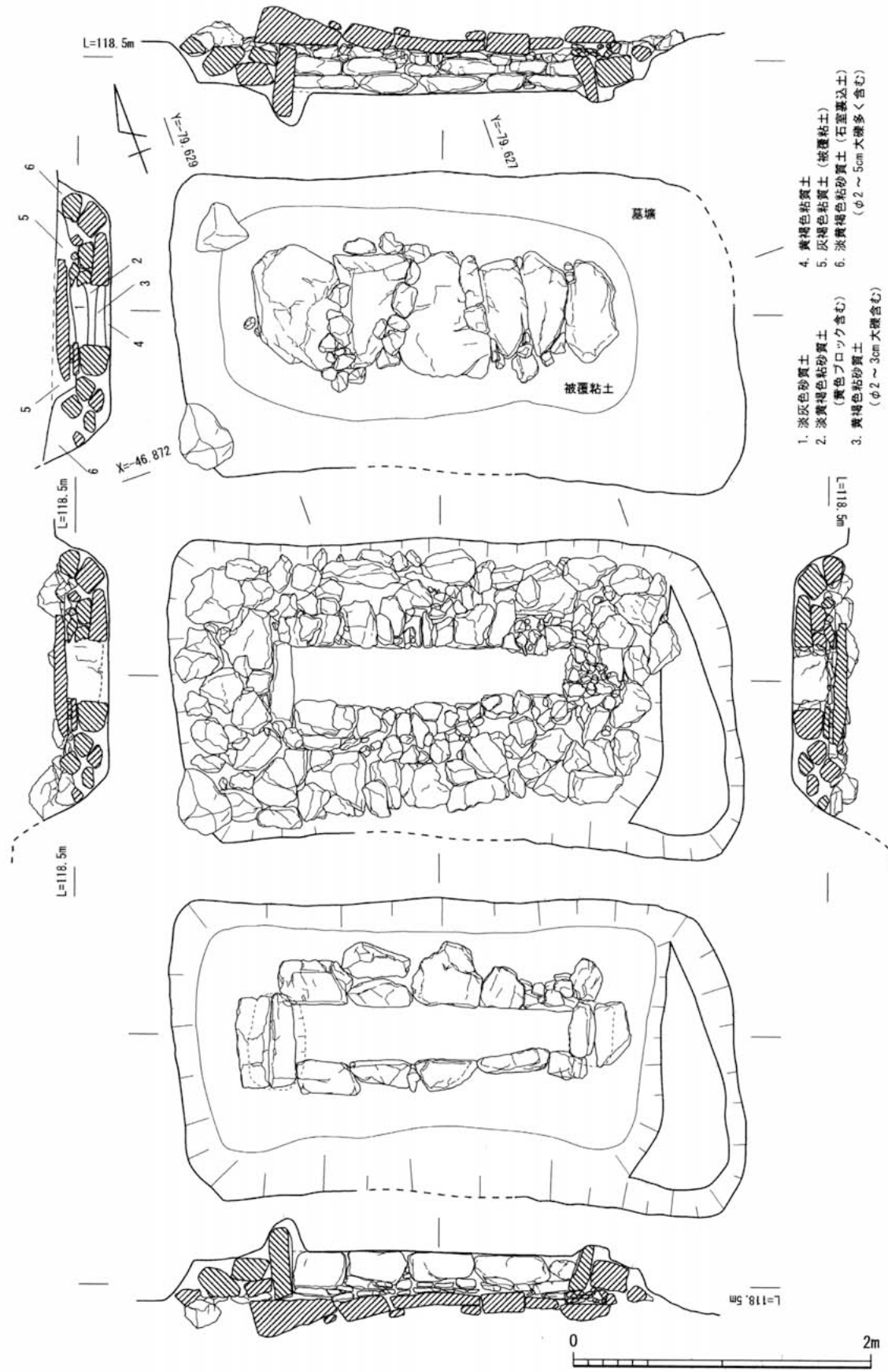
163. 大内古墳群 166. 三重遺跡 172. 大谷城南古墳群 176. 森本大谷古墳 177. 愛宕神社古墳群 180. 大内北古墳群 181. 星ノ内古墳群 191. 三重城跡 192. 星ノ城跡



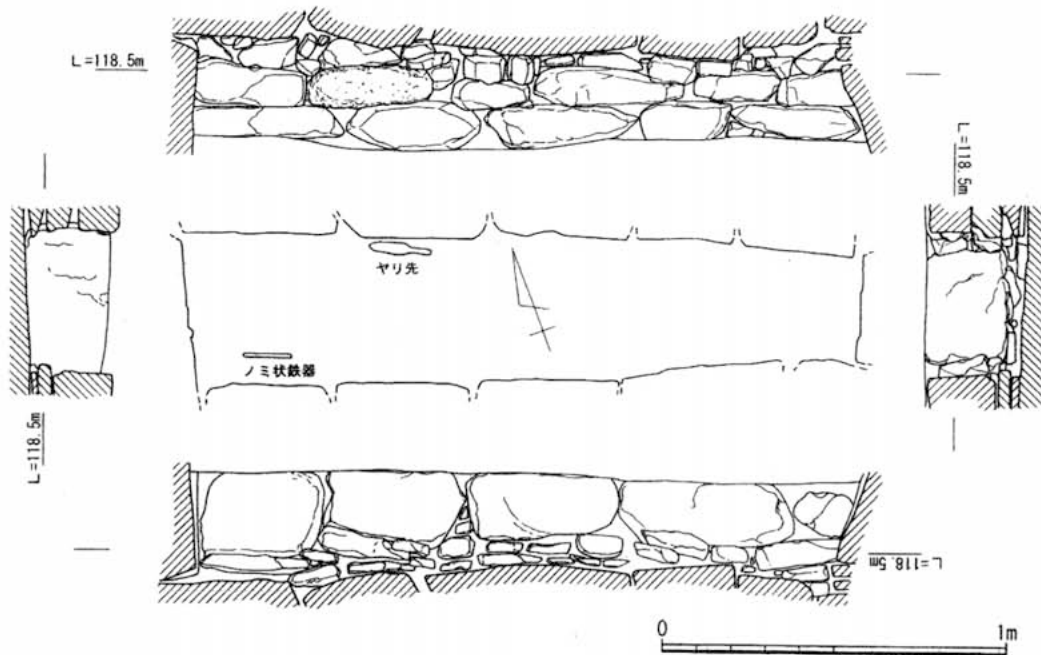
第3図 大内北古墳群調査前地形図



第4図 大内北3号墳墳丘及び埋葬施設位置図



第5図 3号埋葬施設SX01平・断面図



第6図 3号墳埋葬施設SX01 竪穴式石槨実測図

付表 大内北3号墳埋葬施設規模一覧

竪穴式石槨

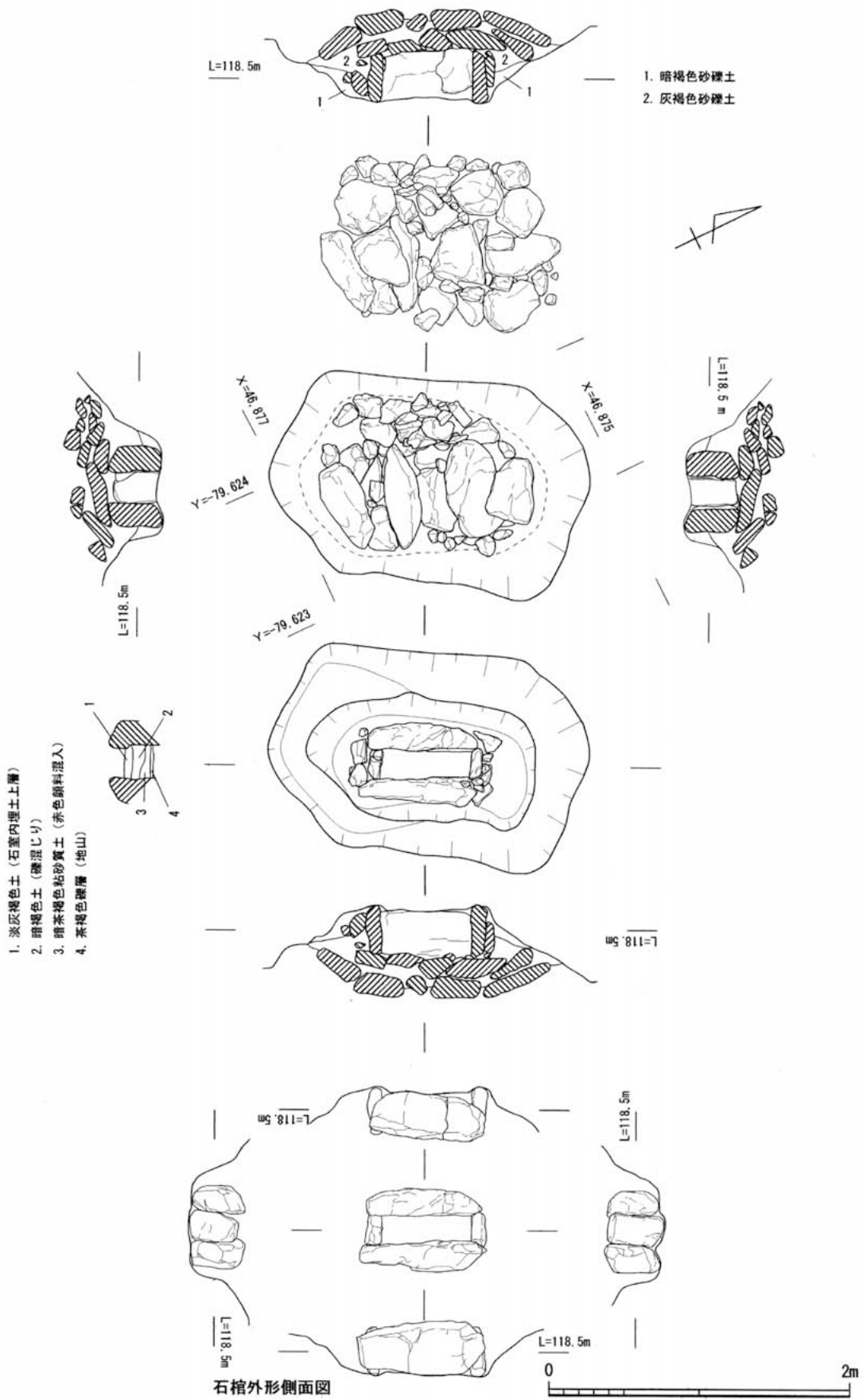
埋葬施設	墓壙規模 (m)			石槨規模 (内法 : cm)			天井石	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
SX01	3.75	2.0	0.35	190	西 40 東 28	25	5石	被覆粘土、鉄やり先1点、ノミ状鉄器1点出土

箱式石槨

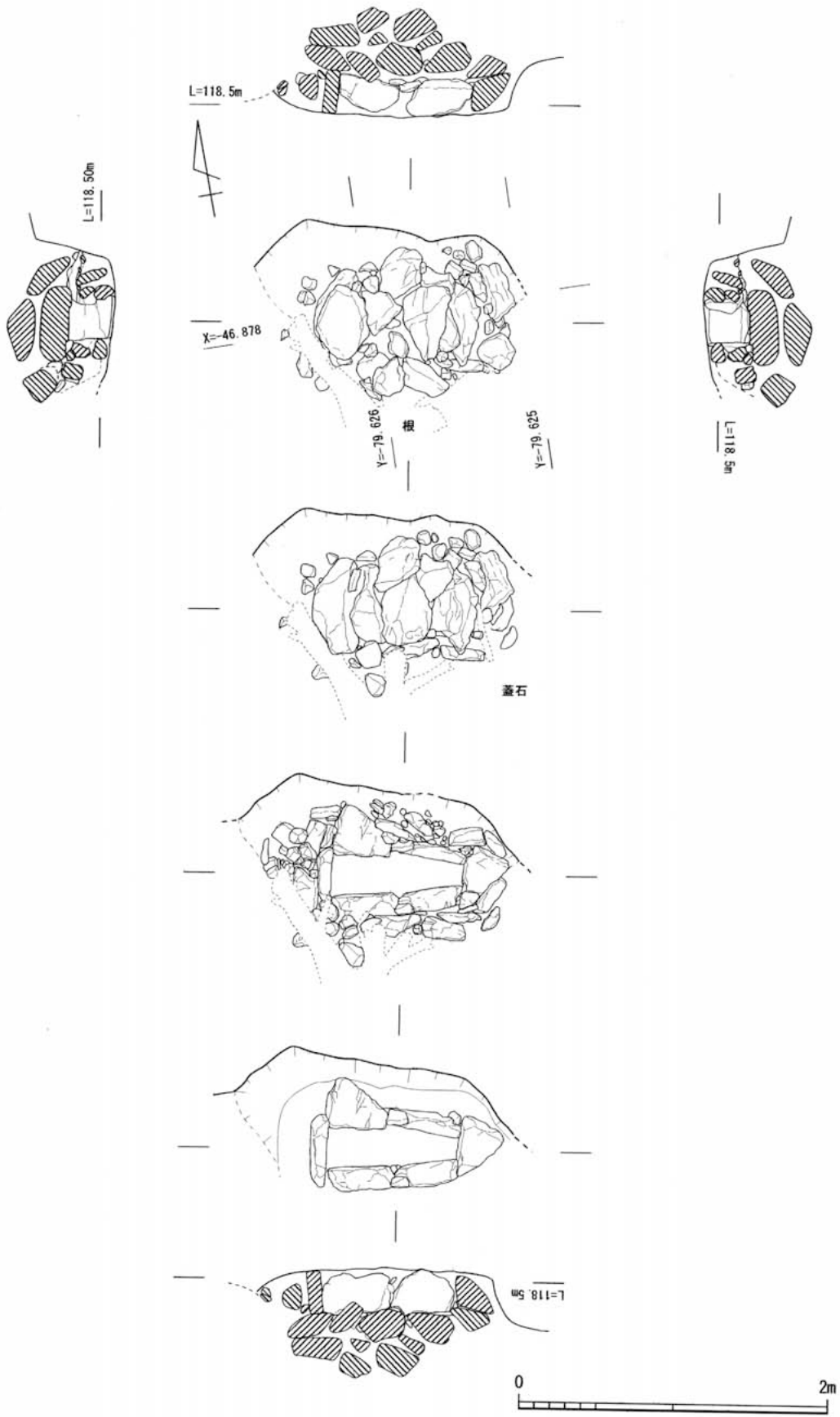
埋葬施設	墓壙規模 (m)			石槨規模 (内法 : cm)			蓋石	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
SX02	上段2.14 下段1.5	1.35 0.83	0.6	60	18	36	6石	壁面赤色顔料塗布
SX03	2.0	1.0	0.7	85	西 26 東 15	30	5石	
SX05	0.16	1.1	0.46	74	東 18 西 15	18	5石	
SX06	上段3.0 下段2.1	1.8 1.0	0.34	96	南 26 北 24	23	5石	刀子1点出土

木棺(直葬)

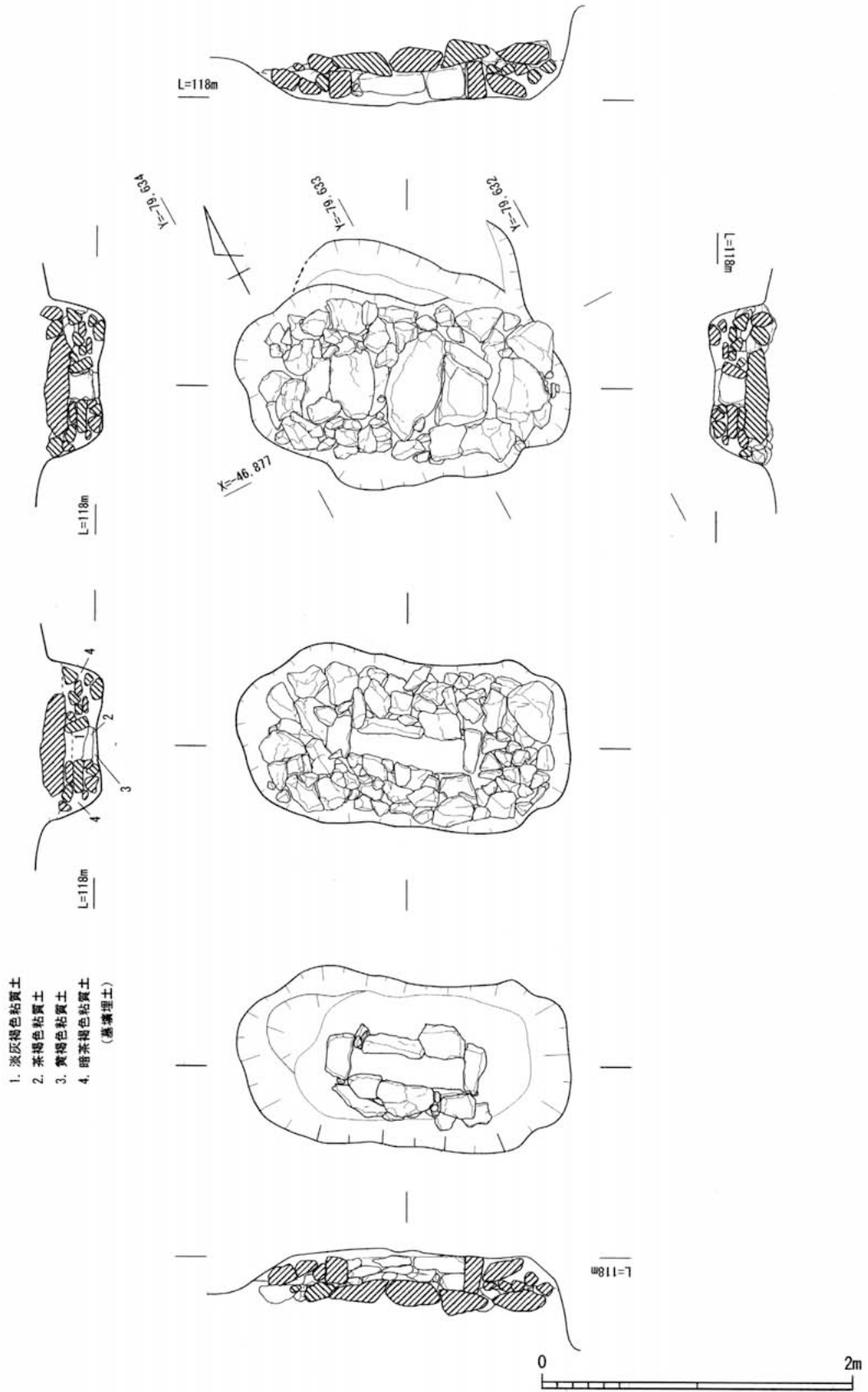
埋葬施設	墓壙規模 (m)			木棺規模 (cm)			棺形態	備考
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	高さ		
SX04	3.5	1.5	0.45	300	80	20	割竹形	
SX07	5.1	3.65	0.5	384	85~100	20	割竹形	棺北東部に赤色顔料集積
SX08				455	58~86	20	割竹形	鉄鎌1点出土
SX09	1.7	0.5以上		130	50	残存部34	箱式	両小口に割石



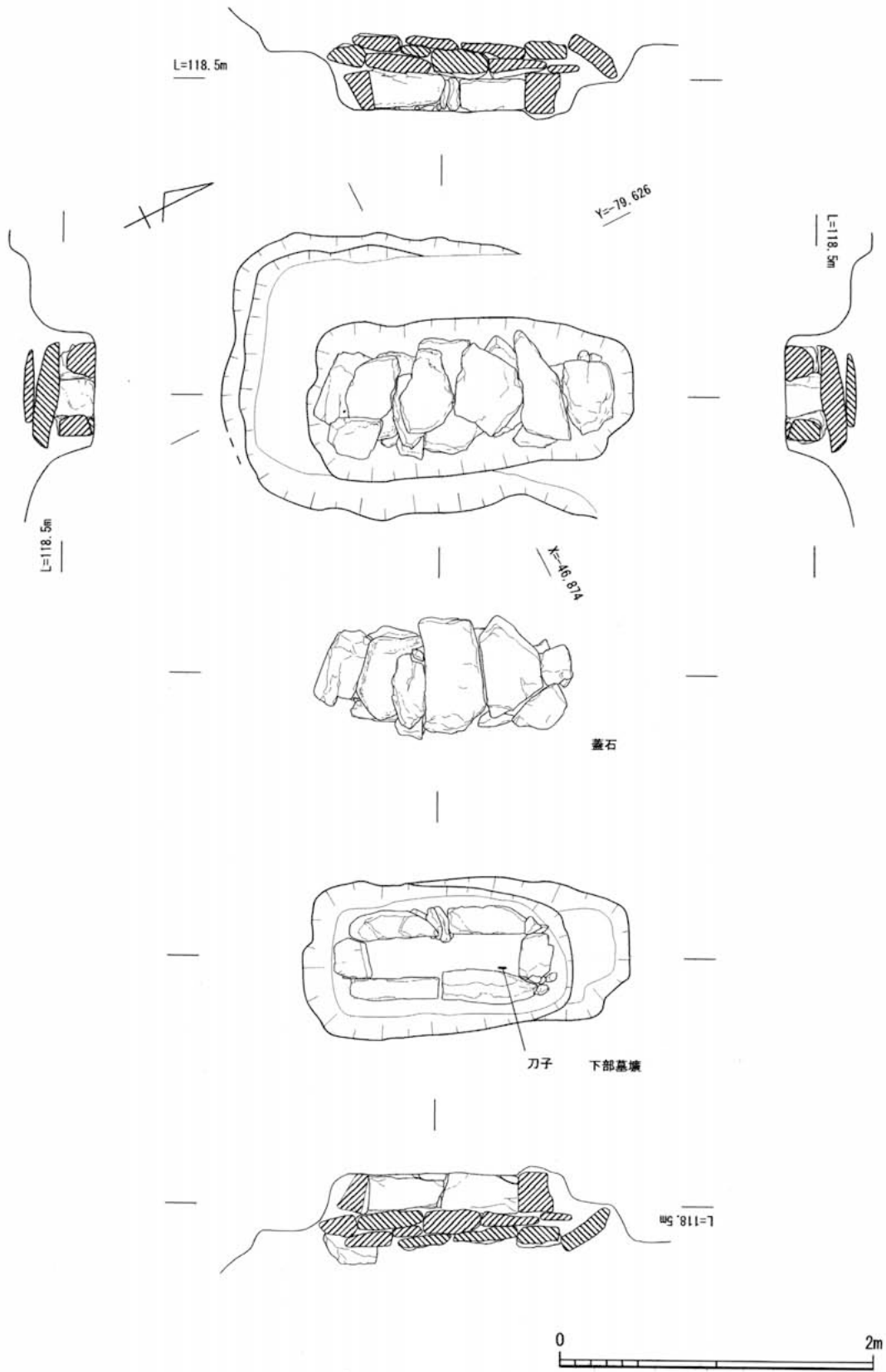
第7図 3号墳埋葬施設 S X02 平・断面図及び石棺実測図



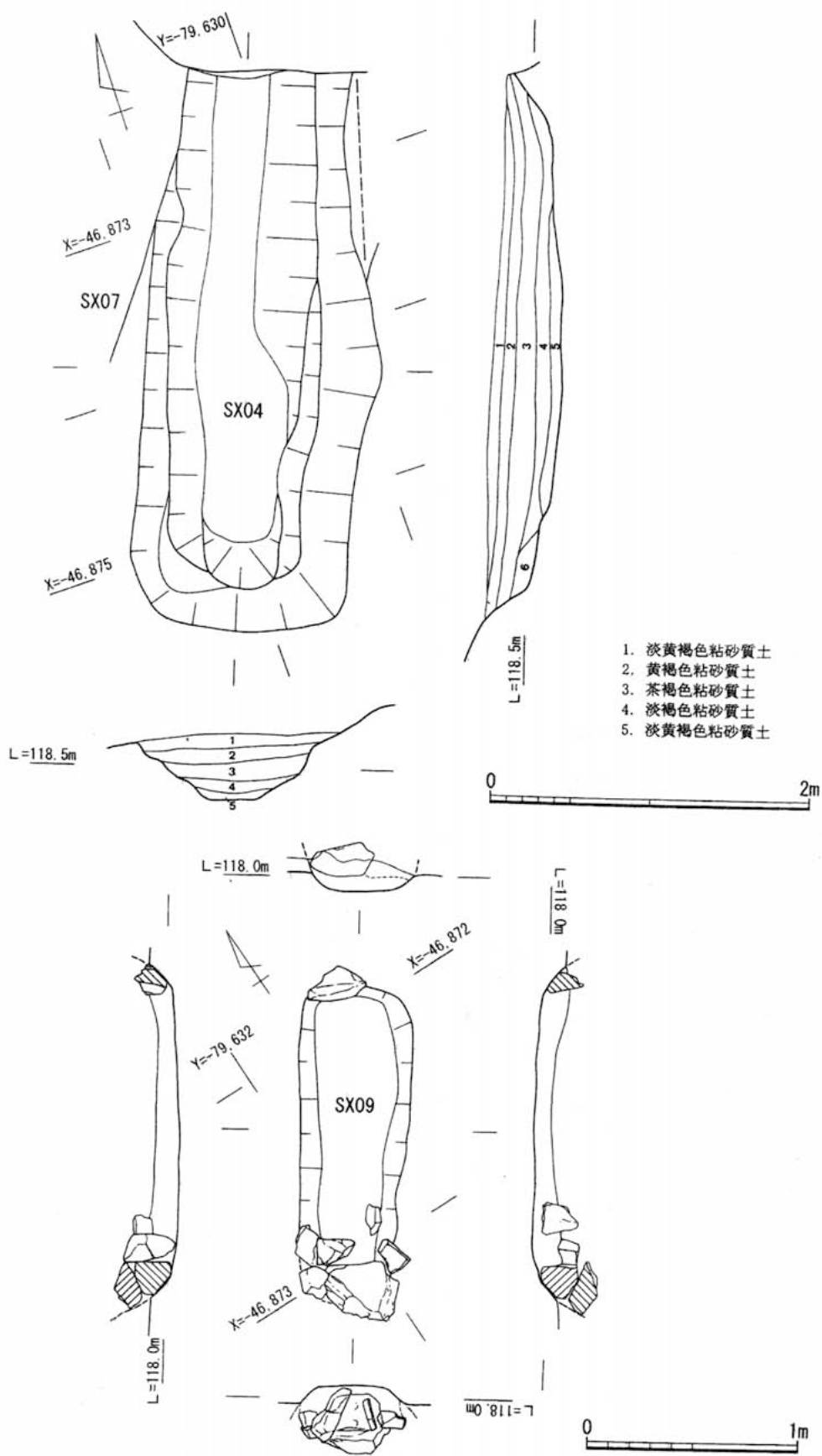
第8図 3号墳埋葬施設 S X03 平・断面図



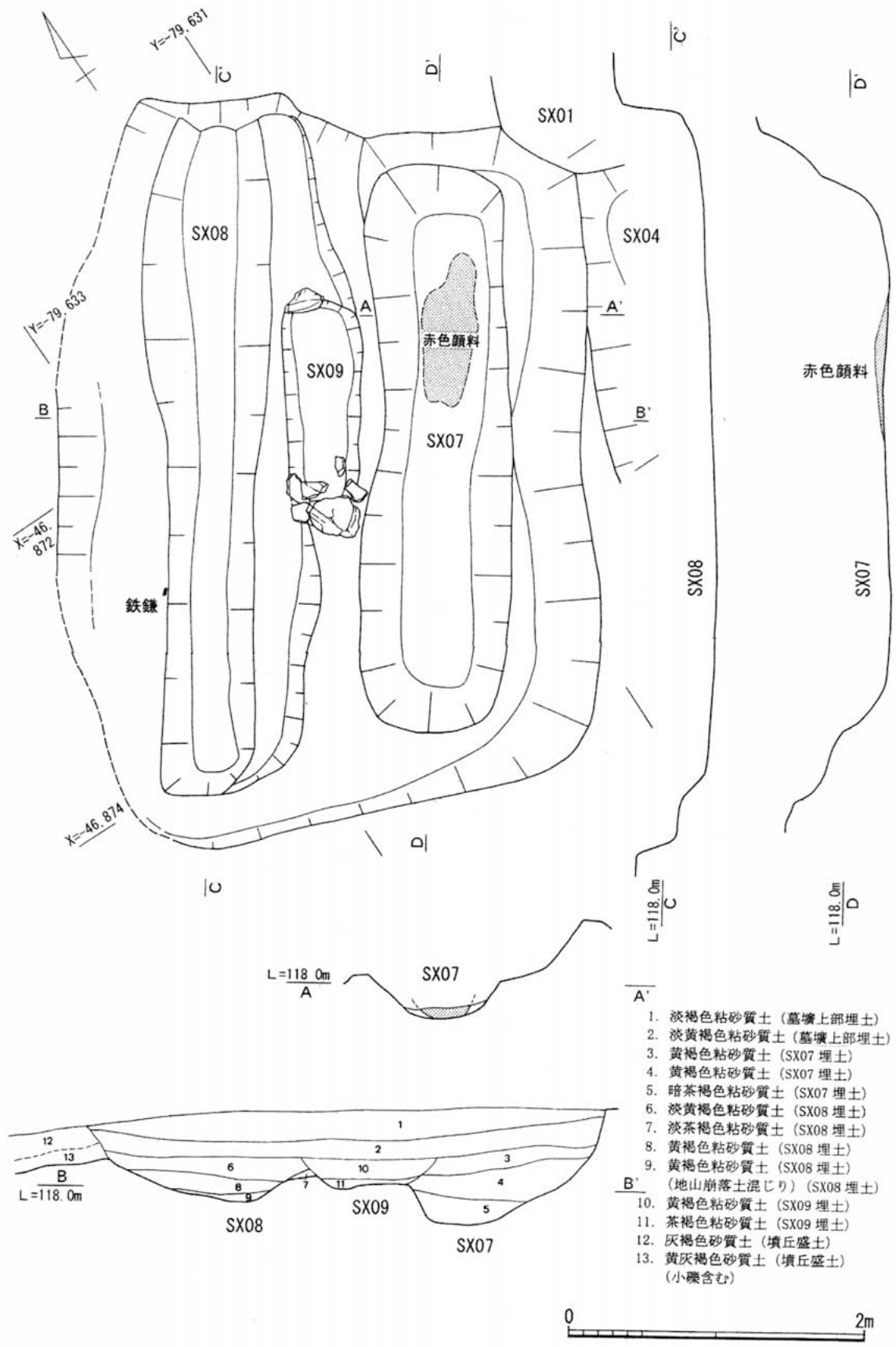
第9図 3号墳埋葬施設S X 05 平・断面図



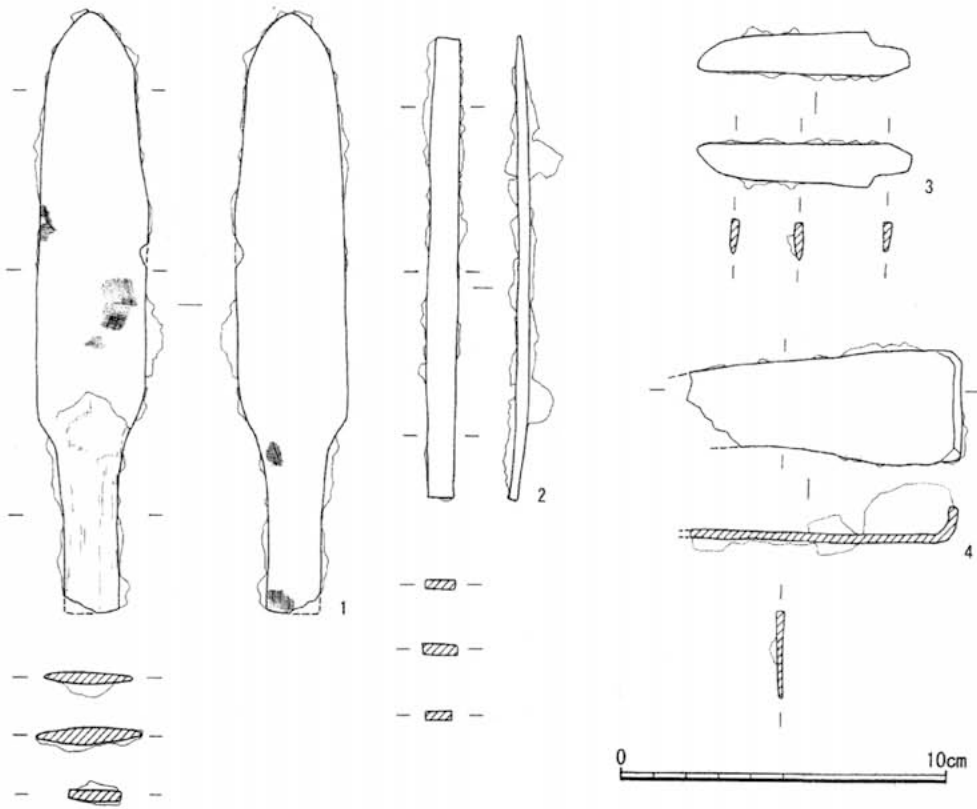
第10図 3号墳埋葬施設S X06 平・断面図



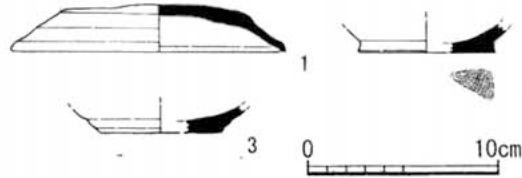
第 11 図 3号墳埋葬施設 S X04・S X09 平・断面図



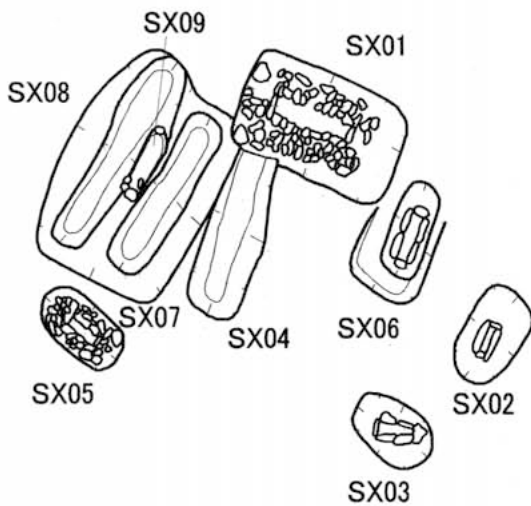
第12図 3号墳埋葬施設 SX07・08・09 平・断面図



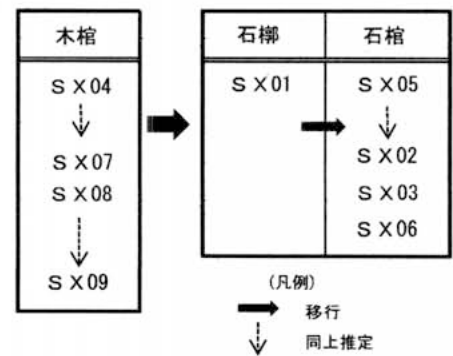
第13図 3号墳出土鉄器



第14図 3号墳出土土器



埋葬施設配置図



埋葬施設の変遷案

舞鶴市 中山城跡の調査

一戦国期の山城の防御施設と宴の場うたげ—

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

次席総括調査員 伊野近富

1. はじめに

京都府北部の最大の川である由良川河口近くに、ひとつの戦国時代の城跡があります。中山城跡です。中山城跡は川に沿った南北に長い丘陵上に10箇所ほどの曲輪くるわを設けた、舞鶴市では最大級の山城で、これまでに6次にわたって発掘調査が実施され、その結果、城は16世紀中葉に建設され、17世紀初頭に廃絶したことが判明しました。

中山城跡では、防御施設ぼうぎょしせつを備えた場所で、甲冑かっちゅうの部品（こはぜ）が出土し、戦いがあった、もしくはその用意がされていたことが判明しました。さらに、天目茶碗てんもくじやわんや京都系の土師器はじき皿が出土したことは、ここで武者たちの対面の場や宴うたげが行われた可能性が高いのです。これらの点に注目して、中山城跡を紹介します。

2. 調査の成果

A. 遺構

平成21・22年度調査で曲輪4箇所を調査しました。城は曲輪くるわ（郭）と人工的な斜面である切岸きりざしを交互に配置して防御施設を整えていました。

最高所に最も広い郭1-1、西側に高さ4～6mの切岸1、次に、狭い郭1-2、さらに西側に高さ10mの切岸2、やや広い郭1-3があります。また、切岸3を造成し、郭1-4が由良川に面して配置されていました。

調査成果によると城の遺構は2時期にわけられます。第1期は16世紀第2四半期に造成され、細川氏が田辺（舞鶴市）に入った1579年ごろまでです。続いて第2期には平坦面を西側に拡張しています。しかし17世紀初頭には廃絶しました。建物はすべて掘立柱建物ほったてばしらたてもので、第1期が郭1-1に2棟。郭1-3に1棟です。第2期は郭1-1に新たな場所に2棟、簡便な棧敷状さじきの建物1棟、郭1-2に1棟です。

郭1-1の北側には堀切ほりきりがあります。そこへは幅1m程度の道を郭の北西部から北側の

小さな郭の中央部に通じていました。その部分だけ地山^{じやま}を掘り残していたのです。

郭1-1の南に平坦面がありますが、ここには建物はなく、外縁^{さく}に柵がありました。この東側に狭い郭1-5を造成していたものの構築物はありません。ここから、南側の丘陵に行くことができます。

B. 出土遺物

土師器皿、丹波甕^{たんばかめ}・すり鉢^{ぼち}、越前鉢^{えちぜんはち}、瀬戸皿^{せとざら}、唐津鉢^{からつはち}、瓦器鉢^{がきはち}、中国製白磁皿^{はくじざら}・青磁碗^{せいじわん}、染付け碗^{そめつ}・皿^{てつくぎ}、鉄釘^{せいどう}、青銅製のこはぜ（甲冑の部品）^{つかがしら}・刀の柄頭^{こいし}、碁石などが出土しました。戦時に立てこもるだけではなく、茶道具や遊び道具も出土しています。

3. 戦国時代の中山城跡

戦国時代の丹後は、名目上一色氏の支配でしたが、若狭^{わかさ}の武田氏^{たけだ}による度重なる侵攻もあり、中山城跡のある加佐郡^{かさがん}はその支配を受けていた時期があります。永正17(1530)年、白井清胤^{しらいきよたね}が武田元信^{たけだもとのぶ}から水真(間)村の支配を命じられており、ここは加佐郡内で、しかも中山の隣地なのです。

16世紀第2四半期(土師器皿の年代は1540年代以降)に造営された中山城の城主が一色氏側だったのか、武田氏側だったのかの判定は難しいです。土師器皿は都で使うものとかかなり似ており、室町幕府^{むろまちぼくふ}の重臣であった一色氏との関連は深いと思いますが、一方、武田氏も幕府^{ぼそかわまさゆき}の重臣である細川政之と近く、土師器皿による判定は難しいのです。鉢は越前もありますが瓦質^{がしつ}や丹波もあって、若狭の強い影響は窺えません。

天正7(1579)年10月に明智光秀^{あけちみつひで}が丹波・丹後を平定したことを織田信長^{おだのぶなが}に報告しています。ここから、約20年細川氏が丹後を治めるのです。この時期の丹後では多くの能^{のう}や連歌会^{れんがかい}が開催されました。

4. 1569年の丹後

里村紹巴^{さとむらじょうは}『天橋立紀行』永禄12(1569)年

5月24日、京都を出発し若狭へ向かう。

6月5日、小浜に入り浄土寺に宿す。

7日、浄土寺隠居等と連歌をおこなう。

10日、源氏物語を講釈する。

11・13・14日に各所で連歌をおこなう。

15日、小浜より舟で和田へ向かう。

19日松尾を経て志楽より舟で蛇島に上陸する。

- 23日千歳浦よりくんだ（宮津市栗田）を経て文殊堂に入る。
 24日天橋立、府中等を見物し、忌木（岩滝町弓木）より嶺山に到り連歌を行う。
 26日頃伊勢物語を講釈する。
 28日嶺山（現峰山）にて連歌をおこなう。
 29日三方三浦介が興行連歌をおこなう。
 6月の晦日に小西山東坊にて連歌をおこなう。
 7月1日堀江作州宅にて宴を催す。
 2日大悲寺正寿院で興行連歌を催す。
 4日、帰洛を志し、成相寺に宿す
 7日、文殊堂前より舟にて蛇島へ
 8日安久の城より岸谷峠を経て上林加州館に入り宿す。
 11日帰洛する。

この時期は、^{あまごかつひさ} 尼子勝久が^{もうりもとなり} 毛利元就によって奪われた^{がっさんとだじょう} 月山富田城奪還のため活動を強めていました。永禄12年春には^{たちはらうんしゅう} 立原雲州が尼子勝久を丹後に招聘しています。そして、6月に尼子勝久は島根半島に上陸したのです。このような緊迫した情勢の中、^{れんがし} 連歌師里村紹巴は小浜から丹後を旅行しました。

その後、里村紹巴は天正9（1581）年4月12日に^{いまいそうきゅう} 明智光秀や今井宗及らと丹後に遊び、天橋立で連歌興行を行っています。

5. 第2期の中山城跡

この時期の丹後はほぼ平穏でした。^{たなべじょう} 田辺城には^{ほそかわゆうざい} 細川幽齋が、^{みやづじょう} 宮津城には^{ほそかわただおき} 細川忠興がいて、お互いに行き来して多くの連歌会や能舞台が開催されました。

第2期の中山城跡は、郭1-1の西側の切岸1を一部埋め立てて、平坦面（郭1-2）を造成しています。防御施設としては後退したともいえるのですが、そこに^{さじきじょう} 棧敷状の建物を建てています。この場所の周辺から天目茶碗や土師器皿が出土しました。おそらく、茶会を伴う宴が開かれたのでしょう。

この時期の城主は^{ぬまた} 沼田氏と言われています。細川氏の重臣であり、中山城の重要性が窺えます。由良川がゆったりと流れ、南東には一色氏が居城したといわれる^{たけるべやま} 建部山が見えるという風光明媚な中山城跡で、宴が開かれたのはほぼ間違いないことでしょう。これは、ただ遊びを目的としただけでなく、武士を含めた有力者たちの結束を固める場でもあったのです。

6. おわりに

中山城跡は、いったいどこを守るために築城されたのでしょうか。日本海から由良川河口を5kmほど遡った地点は、河川交通を監視する場所でありました。由良川を遡ると丹波の福知山に至ります。ここに城を作るということは、内陸部の攻防にとって重要であったことがわかります。

城の曲輪と堀切は丘陵に対して必要以上に多く、統一された城作りではないようです。城は防御施設を備えた場所ですが、宴の場としても使用されたことを紹介しました。

しかし、戦国時代の丹後は、なぞが多く、今回の発掘調査で、その実態の一部が解かれたというのが、実情でしょうか。

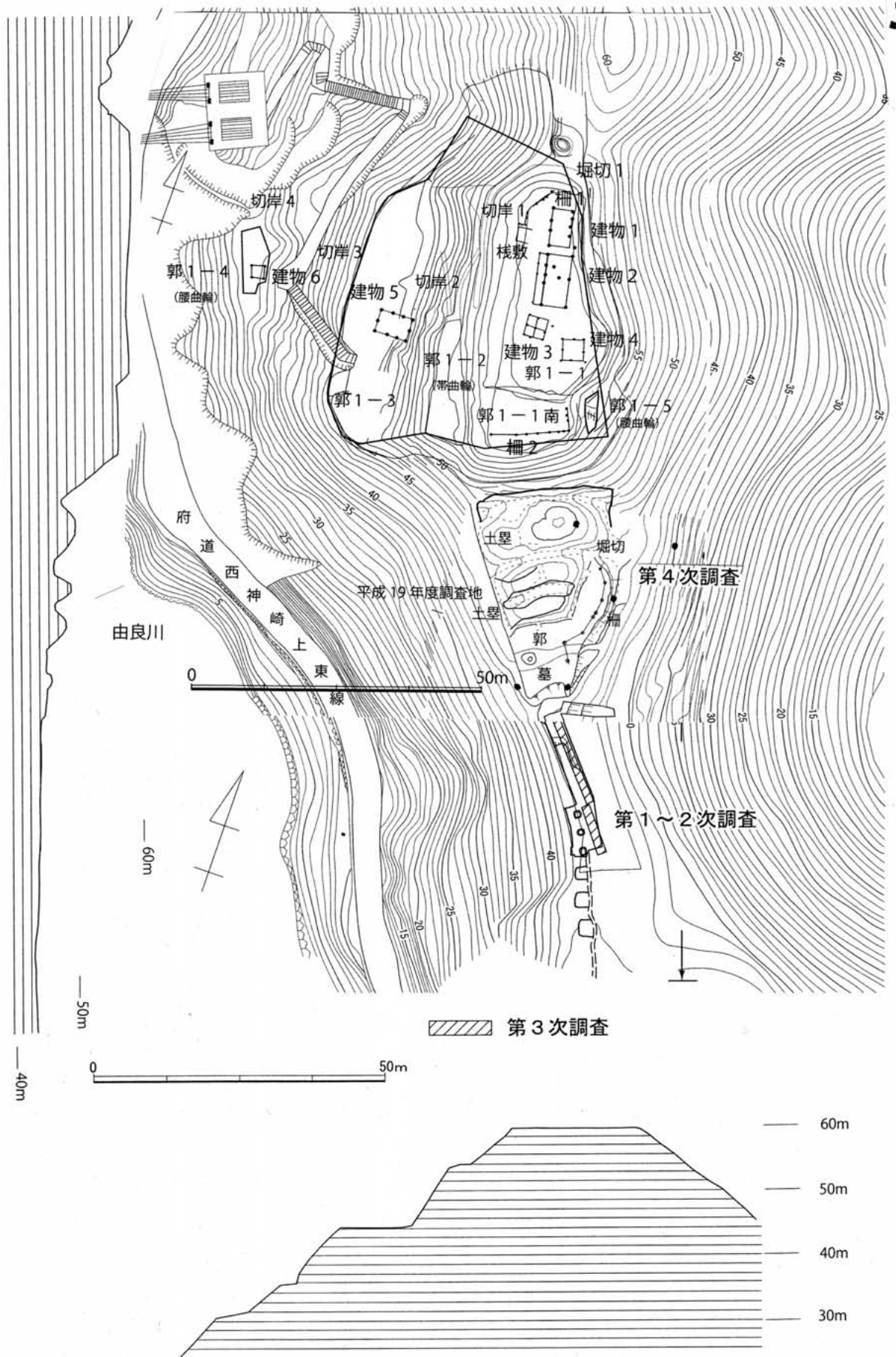


第1図 中山城跡周辺城館跡分布図 (国土地理院 1/50,000 舞鶴)

- | | | | |
|--------|---------|----------|-------------|
| 1.中山城跡 | 2.建部山城跡 | 3.田辺城跡 | 4.愛宕山城跡 |
| 5.福井城跡 | 6.福井支城跡 | 7.高野由里城跡 | 8.引土(茶白山)城跡 |



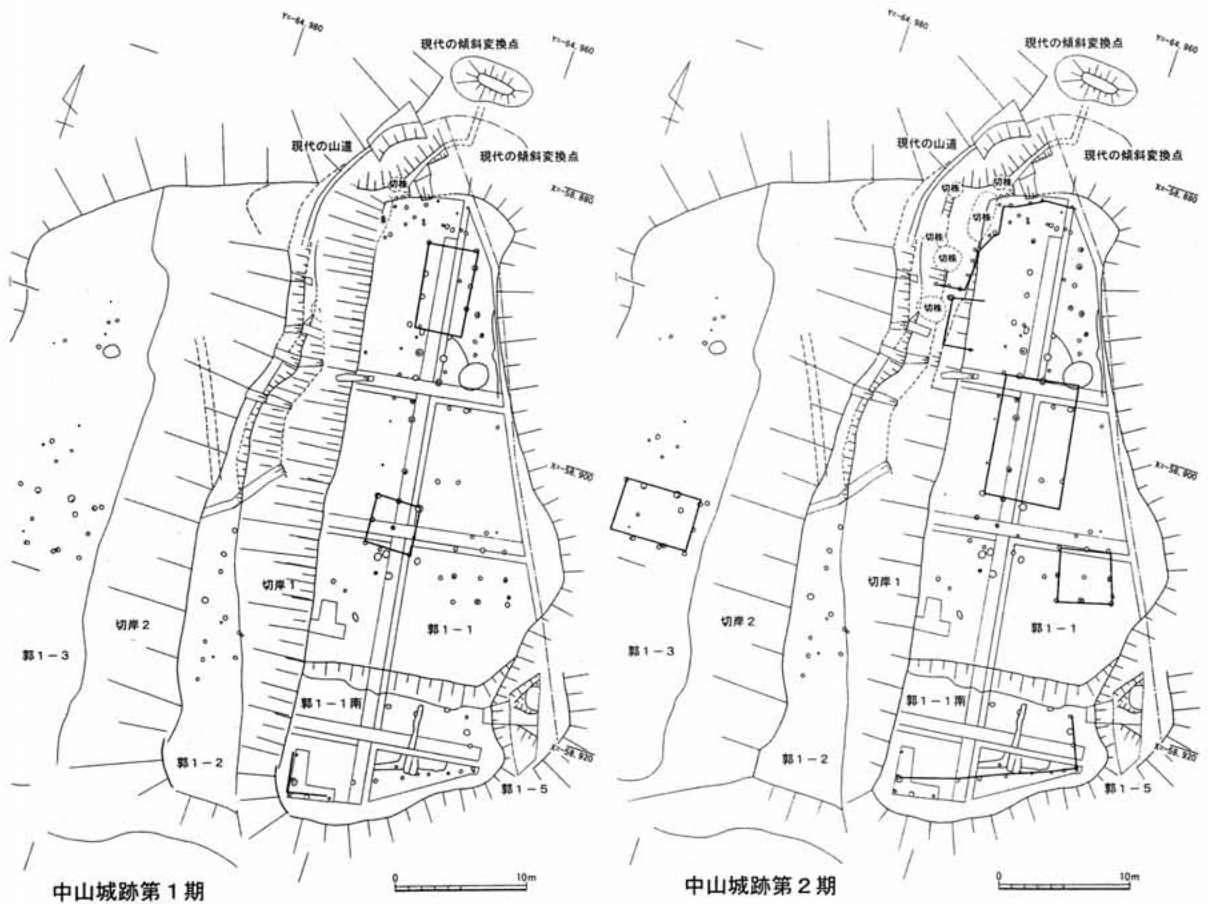
第2図 中山城跡全体図



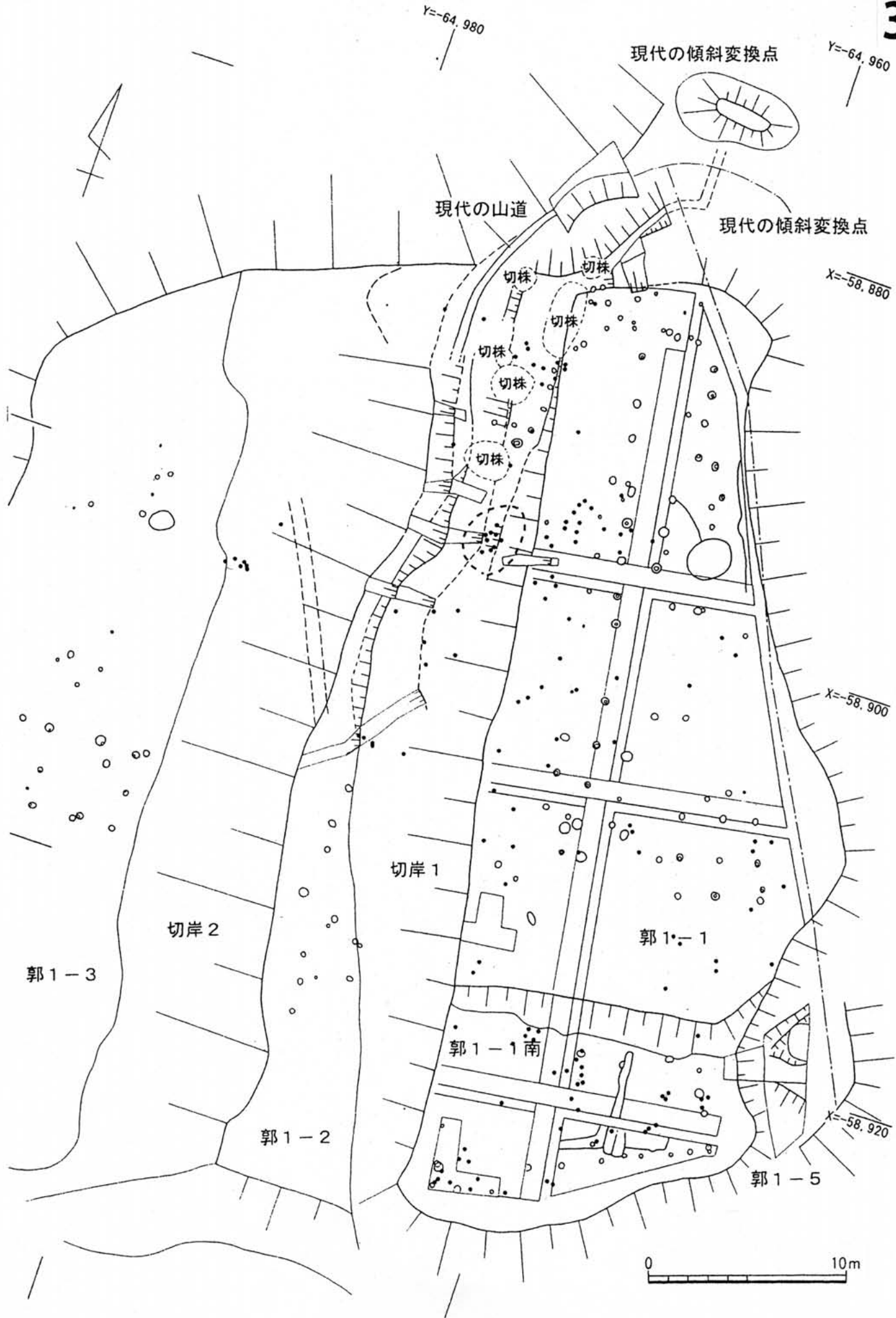
第3図 第4~6次調査地南北断面図



第4図 1569年当時の丹後の城跡



第5図 中山城跡変遷概念図



第6図 第6次調査遺物出土地点図

付表 中山城跡関係年表

西暦	和暦	月日	出来事	出典
1520	永正 17		白井清胤が主君の武田元信から水間村の支配を命じられている	白井家文書
1527	大永 7		丹後の海賊、西津小浜（福井県小浜市）に侵入。	羽賀寺年中行事
1538	天文 7		水間の戦い、白井清胤が武田宗勝から軍功を賞される。	白井家文書
1540	天文 9	7.14	天正年間以後越前船およそ 500 艘加佐郡へ来る。これは、たびたび、丹後の海賊が越前へ来て荒らすための報復。	羽賀寺年中行事
1569	永禄 12	春	立原雲州が尼子勝久を丹後に招聘した。	立原・福屋両家伝
		6月	里村紹巴、若狭から丹後に入り蛇島（じゃしま）に渡る。2日間滞在。大志万但馬守らと連歌会を催す。その後、天橋立に向かう。再び、蛇島に戻り、一色式部少輔に会った後、帰洛。	天橋立紀行
		6.23	尼子氏出雲に入国。	立原・福屋両家伝
1575	天正 3	5.20	信長の武將羽柴秀吉、越前立石浦の篠河兵庫に舟役を徴するに依り□（丹後）及び若狭の舟手に命じ、同浦に舟を繋留することを禁止。	立石浦共有文書
		6.17	信長、明智光秀を遣して、□（丹波）、□（丹後）を平定しようとし、川勝継氏、小島左馬助に対して、忠節を誓わせる。	記録御用所本古文書
		9.28	吉川元春の兵、尼子勝久の属城□（丹後由良）を攻め、是日、之を陥落させる。	細川家文書・吉川家文書
		10月	信長、但馬山名氏の要請により、惟任光秀を派遣して、萩野直正を同国竹田に攻め込ませる。	細川家文書、兼見卿記
1579	天正 7	5.5	信長、羽柴秀吉の要請により、諸將を、□（丹波）に派遣し、惟任光秀を援けて、□（同国氷上城）波多野宗長、宗貞父子を攻撃させる。	小島文書、丹波志、久下文書ほか
		7月	惟任光秀、長岡藤孝と共に波多野氏の余党を□（丹波峰山城）に攻めて、これを陥落させる。又、一色義有を□（丹後弓木城）に攻め、これと講和する。	細川家記、松井文書、有吉家代々寛書
		10.4	惟任光秀、信長を安土城に謁し、□（丹波）、□（丹後）の平定を復命する。	原本信長記

西暦	和暦	月日	出来事	出典
1580	天正 8	4.24	信長、羽柴秀吉の小早川隆景を備中高山に包囲しようとするのを聞き、長岡藤孝、一色満信に応援を内命する。	細川家文書・吉川家文書
1581	天正 9	3.28	羽柴秀吉、近江長浜商人の商売船に折紙を与え、若狭、□（丹後）の海賊の連乱に備えさせる。	南部文書
		4.12	長岡藤孝父子、惟任光秀、紹巴等を□（丹後宮津）に響応する。	津田宗及茶湯日記
		9.4	信長、□（丹後）一色満信、矢野藤一郎の知行分を割いて、長岡藤孝、惟任光秀に分け与える。	細川家文書、兼見卿記
1582	天正 10	6.2	本能寺の変。	
		6.9	惟任光秀は長岡藤孝、同忠興父子を誘うが、藤孝等は応じず、羽柴秀吉に応じる。	細川家文書、細川家記、細川忠興軍功記、太閤記
		7.2	□（丹後田辺）の長岡藤孝、本能寺に故信長追善連歌会を催す。	秀吉事記、太閤記、細川家記ほか
		7.11	秀吉が忠興に丹後一円支配を安堵する。	細川家文書
		9.8	長岡忠興、□（丹後弓木）の一色義有を、同国□（宮津城）に誘殺す、尋で、□（弓木城）を取る。	細川家記、細川忠興軍功記、松井家譜、細川忠興記
1584	天正 12	8.25	丹後田辺において連歌。	連歌総目録
1592	文禄元	4月	一之斎（沼田弥七郎統兼）より、父宗禅（上野介光兼、幽斎の岳父）三十三回忌の懐旧連歌の発句を乞われる。	詠草「永青文庫」
1597	慶長 2	1.23	田辺城で能楽。細川幽斎は女郎花の太鼓をたたく。	古来番付「永青文庫」
1600	慶長 5	7.17	石田三成により忠興夫人玉（ガラシャ）自殺させられる。	時慶卿記
		7.18	丹後田辺城に籠城を開始。	細川家記・時慶卿記
		9.15	関ヶ原の戦い。	
		9.18	田辺城を下城し、翌日、丹波亀山城に入る。	細川家記
		12.26	忠興戦功を認められ、豊前・豊後国 39 万石を拝領し、入国。豊前小倉城を本拠と定める。	細川家記
1601	慶長 6	閏 11.29	幽斎がはじめて豊前に下向。	舜旧記



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877(代表) Fax (075) 922-1189